
ファンタジーでいこう！

ニラ御坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーでいこう！

【Nコード】

N8147D

【作者名】

ニラ御坊

【あらすじ】

平凡とは少し言えない高校生・生島北斗^{いくしまほくと}の前に突然現れた剣。以後その剣をめぐって様々な騒動が起きる。北斗はそれを解決しているのか！？

プロローグ（前書き）

はじめまして、ニラ御坊と申します。初めて書くので誤字、脱字があるかもしれませんが見ていただければ幸いです。

ブローグ

暗い洞窟。

分かるのはそれだけだった。

そしてそこには1人の男だけがいた。

全身ボロボロである。

しかし初老に入った男の顔はにやけていた。

「ついに見つけた」男はポツリと呟くと洞窟の壁に手をあてた。
すると洞窟が輝き始める。

「なんだ!？」

しばらくすると光は鎮まった。

しかし男は慌てる。

「ない!どういうことだ!？」

…こうしてはいられん。すぐに追跡を」

男は急ぎ足で洞窟を立ち去った。

1話：学校という名の非日常

おはよう諸君。

…駄目だ。しよっぱなからこんな挨拶じゃ。
あらためておはよう。

俺の名前は生島北斗。ごく普通の高校生だ。

今日は火曜日。

そして今は10時だ。

学校は？だって

問題ないさ。予定通りだ。

今から朝食をとって顔洗って…

それで学校だ。

省略しすぎな気がするが俺の朝は描写が必要なほどたいそうなもの
じゃないからな。

さて…今教室の前にいるんだが

ガラッ…

俺が扉を開けたと同時に拳がとんでくる。
俺は慌てることなく受け流した。

目の前には長い金髪を無造作にくくり、白衣を着た女が立っている。
ちなみに教師だ。俺のクラス担任でクラブ顧問でもある。

あ、担当は保健ね。

顔は美人と言ってもいいのだろうか？

つり気味の目に凜々しい眉毛。全て金髪だ。

「生島ア、貴様毎週毎週この時間だけ遅刻するとはどういっ了見だ？ああ！？」

およそ教師らしくない発言だな。

「まあいいじゃねえか。志摩さん」

言い忘れてたが名前は志摩静代だ。年は…聞いたら鉄拳くらいけたから知らねえ。

「ならば毎週火曜日は必ず4時間目に来る訳を教えろ」

そう俺は火曜日は必ずこの時間に来る。理由は

「この日の朝の授業だりいんだよ」

火曜日は1時間目から国語、社会、数学。だりいだろ??

「ほお…いい度胸じゃねえか」

ありがとうございます。

「誉めたんじゃねえ」

「おっと口に出てたか」

「貴様…」

『きんこんかこんこん』

ナイスタイミング！

「くつ、まあいいクラブで覚えてろよ」

ちなみに俺は剣道部所属ね。

まあ怒らしても放課後には忘れてるだろ。なんせ単細胞だ…グハア

「貴様、考えてることを口に出す癖なおしたほうがいいぞ」

じゃあ生徒に手えだすのやめろ。

「まあ今日はこれくらいにしてやるっ」

そして志摩さんは教室を出た。

「北っくん、おっはよ〜」

「おはよう。DNAの七不思議。」

こいつの名前は新島姫子^{にいしまひめこ}。

こいつの特徴は鮮やかなピンクの髪。

両親が赤髪と白髪で生まれたのがピンクの髪ってわけだ。

不思議だろ？

絵の具じゃねえんだから。

ちなみにまたの名を二次元の住人。

顔は…まあファンクラブがあるらしい。

大体分かるよな？

「むう、相変わらずやだな。そのあだ名」

「んでなんだ？姫」

姫ってのはあだ名だぞ？

別に趣味とかじゃねえぞ。

こいつとは世間一般でいう幼なじみってやつだ。

「や、特に用はないけど…でもあの志摩先生相手によくやるね」

「まあ、あれの相手は慣れたからな。さすがに1年間振り回されると」

「そうなのかなあ？私は絶対慣れないだろおなあ」

まあHRの時に怪我人出る程本気でドッジボールするような先生は志摩さんくらいだろおなあ。

ちなみにクラスの奴らは知らないだろうけどこころへん牛耳ってる不良のグループ全て壊滅させたんも志摩さんなんだ。俺が付き合わされたからな。

さすがに100人はキツかったんだろう。

「よしお昼ご飯食べよう」

「
おう」

俺は自前の弁当を取り出した。

さて…クラブに備えて寝ないとな。

志摩さん絶対にむちやな練習させるだろうし。

1話：学校という名の非日常（後書き）

1話目です。

今のところ全くファンタジーの要素ないですね（汗）

でも次の回で多分…です。

2話：今日の天気は剣のち化け物

え〜と…これはいじめなんじゃないのか？

「どうした？生島。お前なら楽勝だろ？私の授業に遅刻するくらいなんだから」

やばい、完全に根に持ってやがる。

状況を整理しよう。

俺のまわりには胴着と竹刀を武装した剣道部員10人。

対して俺は竹刀のみ。

「先生、俺死ぬと思います」

一応抗議してみる。

「大丈夫だ」

ああそうですか。分かってましたよ。許してもらえないくらい。

つうかその根拠のない自信はなんなんだ？

「悪いな、生島。本気でかからないと俺達がやばいからな」

目の前の奴（名前知らねえ）がなんかほざいてやがる。

腰抜けどもが。その言葉は精いっぱい抵抗してからいいやがれ。

「んだと。腰抜けだと？
上等じゃこら」

…口にててみたいだな。
やばい、みんな殺気立ってる。

…じゃあねえか

「おお、また志摩先生が生島に無茶さしてんな」

脇役剣道部員（略して脇剣）がつぶやいた。

「先輩、どうしたんすか？」

新入剣道部員（略して新剣）が聞いた。

脇剣

「ああ、志摩先生は生島鍛えんの好きなんだ」

新剣

「ええ！？あれどうみてもいじめじゃないですか」

脇剣

「いや、見慣れたもんだぞ。

剣道部の風物詩みたいなもんだ」

新剣

「でもあれだと生島先輩死ぬでしょ？」

脇剣

「いや、あいつ見てみ。余裕だぞ」

新剣

「うわっ、攻撃全部避けてる」

脇剣

「あいつ試合とかでも相手の剣を全て避けて勝ってたんだ」

新剣

「滅茶苦茶じゃないですか」

脇剣

「だから志摩先生の目に留まったんだろ。
あれで剣道経験１年半だから驚きだぜ」

新剣

「１年半!？」

ほんと滅茶苦茶ですね。

でもちつとも有名じゃないみたいですけど」

脇剣

「あいつは大会とか出ないんだ。

志摩先生にとめられてて。多分有名になるといじめにくくなるから
じゃないかな」

新剣

「今いじめって言っちゃいましたよね？
でもすごい才能ですね」

脇剣

「ああ、俺もつらやましいよ。
オマケに主人公だし…俺なんか名前すらないのに」

田中

「しょうがないですよ先輩」

脇剣

「うるせえ！！つかお前なんでいきなり名前付いたんだよ。
つらやましすぎるぞ新入部員のくせして」

田中

「おそろくきまぐれによるものと。
でもこんなありふれた名前嬉しくないですよ！」

山田川

「それでもつらやましいんだよ！」

田中

「あ、先輩名前付きましたよ。
よかったですね」

山田川

「おわマジだ！」

つうかうれしくねんだよ。なんだよ山田川って。
なんで微妙にありそうでなさそうなんだよ！
つか何！？

山田と山川が混ざったのか！？
つか：

北斗

「うるせええええ！！！！」

すばあああん

つたく、いつまでしてんだ？

あんな出来の悪いショートコント。

あまりにも長いからしばいたけどな。

つて、その年でヅラかよ。

何があつたんだ？

あの先輩。

「生島ア、よくやった。次のいじ…練習に移るぞ」

いま確実にいじめつて言おうとしましたよね。

「はあい」

「素直でよろしい。んじゃ次はこのこんにゃくで……」

ずどおおおん！！

こんにゃくで何をするか非常に気になったがその説明はいきなり空から落ちてきた光の爆音でかき消された。俺達が練習していた場所のど真ん中に落ちてきた光。

光がはれるとそこには剣があった。

……つて剣！？

なんで空から？

「なんだ？どうしたあ？」

志摩さんが現状確認のため声をあげた。

「せ、先生！

剣が降ってきました」

応えたのは新入部員の…田中だっけか？

「剣だあ！？」

まあ驚く気持ちも分かるよ、志摩さん。

剣が降ってくるなんてどこのファンタジーなんだよ。

「おしっ生島行くぞ」

「へいつ」

おもわず下っ端の返事をしちゃった。

剣のまわりはすでに野次馬でいっぱいだった。

よく見ると姫の姿もあるな。あいつはなぎなた部だっけか。

「どいたどいた」

群がる生徒を押し分け進む志摩さん。

付いていく俺。

なんかマジ下っ端みたいだぜ。

「これか…」

剣は床に深々と刺さっていた。
刀身は太い。

あれは…大剣っていうのか？

「くっ、生島手伝え。抜けん」

志摩さん、あんたなんでそんな怪しさマックスのもんいきなり抜こうとするんだ？

「生島ア、速く手伝え」

「へ、へいつ」

…マジ下っ端だよ俺。どれどれ。

「よっ、と。」

んだよ結構軽いじゃん」

軽々と抜いた俺を驚愕の表情で見る志摩さん。
そんな驚かなくても。

「お前、すごいな」

「たしかに重いけどなんとかいけますよ」

「お前もついに私を抜いたか。悲しいなあ。子どもが巢立つのを見るのは」

俺がいつあんたの子どもになったんだ？

滅茶苦茶言ってる志摩さんほつといて、っと。

しかし結構重いな。

こりゃ振り回すのに力いるわ。

まあそんな心配いらんだろうけど。
これどうしょ？

ずどおおおん！！

またなんか落ちてきたよ。
もういいって。

『キシヤアアア』

…えゝものすごいエグいのがこっち見てるんですけど。
何？

翼はえてるよ？

眼球ないよ？

爪異様に長いよ？

つか人間じゃないよ？

ってこっち来たああ。

ガキン

俺はとっさに剣の刀身で爪を防いだ。

うわっ、すごい力。これやっべえ。

ドンっ！

急に気持ち悪いのが視界から消えた。

ナイス、志摩さん。

志摩さんが気持ち悪いのをぶっ飛ばした。

まあそれに巻き込まれた生徒に関してはご愁傷様だな。」「生島ア、何してる。

あんな奴お前なら楽勝だろ?」

会って1分たつてない未知の生物の力量なんてわからないだろがぁ! どうかそんな自信が出てくる?

しかし…

「重いんすよ、これ振り回すだけでも精いっぱい」

「んなもんなんとかなるだろ?

どうにか…くっ」

復活した未知の生物が志摩さんに襲いかかった。

志摩さんは軽くガードして体制を立て直した。

あの人剣道部顧問のくせに素手がやたら強いんだよな。

しかし…どうにかなんのかこれ?

重すぎ。

「重いんだよ、バカ。軽くなりやがれ」

やけになって言ってみる。

すると剣はパキパキッと音を立てて形を変えた。

刀に

おお、言ってみるもんだな。
よし、これで…

「志摩さん！加勢しま…って、ええっ!？」

マジで？

こっから俺の見せ場なのに。
なんでもう倒してんのさ？
なんで跡形も残ってないのさ？

「遅いぞ、生島。奴はもう私の『絶対消滅拳』で果てたぞ」

何？

その子どもが考えそうなシンプルな名前
つかマジ果てたな。

跡形無く…どうやってたら素手で消滅なんてさせられるんだ？ 「私
だからだ」

どっかで聞いたことあるセリフだな。

つうかまた口に出してたな。

「それよりいいじゃないか。その刀」

「そおつすね」

見せ場取られたから若干不機嫌な俺。

しかし見事な刀だ。俺は鑑定士じゃないけどこの刀はすごい。

曇りひとつないその真っ白な刀身に対照的な真っ黒の柄。
おっと、鞘もあるのか。
これも真っ黒だ。

俺は慎重に刀を鞘におさめる。

ん？

刀身に文字が

『初撃を放つは斬れる万物』

どういう意味だ？

まあ今気にしても仕方ない。
とりあえず今は事態を治めなくては。
… ってもうほとんど誰もいねえじゃん。 どんだけ飽きっぱいんだ？
うちの学校の奴らは。

「生島ア、今日はとりあえず上がりだ。 もう帰っていいぞ」

お？

珍しいこともあるもんだ。

「はい」

ここは素直に返事しとくに限る。

剣は… とりあえず持って帰るか。

「おつ、 姫。 お前も上がりか？」

「うん、 北斗。 一緒に帰ろ！」

「おつ」

後ろから負のオーラを感じたが別にいいか。

どうせファンクラブだろ。

「ねえ、北つくん。
さっきの…」

姫がおずおずと聞いてくる。
まあ気になるわな。

「ああ、あれは気にするな。多分夢かなんかだろ」

言い訳にはおかしいぞ俺。
夢って…

「そうじゃなくて…志摩先生が」

「ん？
志摩さんが？」

「あの化け物が先生を叩いた途端先生がキレて、そこから一瞬で化

け物消えちゃって。

私先生の方が怖かった」

た、たしかにそれは怖いな…

「まあそれも気にするな」

「う、うん。」

そおだ北つくん！

久しぶりに晩御飯食べてく？」

「マジで！？」

1人暮らしの俺にとって願ってもないことだ。

「う、うん。」

今日両親いないし」

マジで！？

落ち着け。

いいか？

今のセリフにラブコメ要素はないぞ。

たとえば姫がうつむいて顔を赤らめていても。

俺はそんな方向には…

うん、まず付き合ってないし。

「どしたの？」

そんなに悩んで。

今日は従姉妹も来てるからみんなで遊ばー！！

今日は寝かせないぞ！」

発言の最初と最後だけ聞くとやばいな…っつか悩んだ俺がバカみたい。

「んじゃいこっ！」

「おう」

この時あんな騒動に巻き込まれるとは…

まあ思ってたよ。

刀もしっかり腰にあったし。

にしても志摩さん今日変だったな。

いつもならあそこでまだ続けるって言いかねないんだが…

はっ！

もしかして伏線ってやつか？
実は志摩さんは敵のスパイでっていう展開か？
明日聞いてみよ

「社長、先ほど1802に追跡Gの生体反応が途絶えました」

都会のとある一角。65階の高層ビルの最上階に椅子に座った影と立った影があった。

「ふむ。おそらく他の2ヶ所もそのうち途絶えるはずだ。
今度は戦闘Gを送れ」

「しかしもう残り数があまり…」

「それに関しては大丈夫だ。
バイオテクノロジーを少し応用すれば量産可能とパソコンが叩き出した」

「わかりました。
では早速手配します」

そして立った影が消えた。

「ふう、もうすぐ迎えに行けるよ。妃奈」

3話：化け物倒そういじめられ仲間が出来た日

あゝ眠い。

結局昨日は姫の家で徹夜で遊びまくったからな。

「生島ア、朝から居眠りたあいい度胸じゃねえか」

「志摩さん、今日は勘弁してくれ」

「ほお、ならばもうとやかく言わねえよ」

マジ！？

「ああ、あそこで寝てる奴と一緒に廊下に立ってな」

廊下って…

どんだけ古いんだよ。

「さっさと行け」

「へ、へいっ」

もう下っ端でいいよ。

で、まあ今廊下に立っているわけで。

ご丁寧にバケツまで持たされて。

徹夜したから力入んねえし結構重い。

「うう…重い」

隣では一緒に徹夜した姫が悲鳴をあげてる。

姫が悲鳴…

…プッ

「北つくん…オヤジギャグだよ」

口に出してたか。

「それより北つくん、その刀は何？
昨日から気になってるんだけど」

ああ、言い忘れてたがまだ刀は腰にある。
まあそのうち銃刀法違反で捕まるかもな。
はずれねえから仕方ねえんだが…

風呂に入る時は外れたな。
服着たら知らん間に付いてたけど。

まあ猥褻物陳列罪で捕まる方がイヤだからな。

「北斗？」

なにぼおっとしてるの？」

「ん？ああ悪い。」

つつか前から気になってたんだが
なんでお前たまに北斗って呼ぶんだ？
いつもは北つくんって呼ぶのに」

「気分！」

特に意味はないよ」

そうですか。

「で、北つくん…その刀は？」

「ああ、気にするな。
護身用だ」

一番もつともらしい理由を言ってみる。

「北つくん…そこまで私のことを」

「は？」

何言ってんだこいつ。

「私が暴漢に襲われたときのためじゃないの？」

まあいつも一緒にいるようなもんだからな。

だが…

「勘違いするなバカ。
なんでお前のために法律まで破って剣なんか持つんだよ」

うん、守るだけなら武器いらねえからな。

「むう…そか。
んじゃ

「生島ア」「

やべっ、志摩さんだ。
SHR終わったのか。

「貴様罰を受ける身でありながら女とイチャこくとはどっいつ了見
だ？ああ！？」

イチャこくって久々に聞いたな。
しかしどうしよ。
またいじめモード入ったらなあ。
今日はやばいからな。

…そういえば

「志摩さん。

昨日あの後どこ行ったんすかあ？」

『伏線』の話を持ち出す。
絶対焦るはずだよな。

「何言ってんだ？
昨日はすぐ帰ってねたぞ？」

予想外に即答されたよ。

…プロだな

「またあ、どこか行っ秘密の報告してたんじゃないんすか？」

もうちょっとカマかけてみる。

「本当に何言ってんだ？
お前。

私は昨日『絶対滅殺拳』を使ったせいでSPがなくなっただ」

…技名変わってますよ。
っうか

「SPって何？」

「スキルポイントだ」

「どこのRPGだよ！」

「…そうですか」

結局俺の『伏線』説ははずれだったわけだな。

「それよりだな、貴様らはまだ反省が足りんようだ。
もう少し罰を与えてやるぞ。喜べ」

俺らはどこのMですか？

「わ、わぁーい」

いちいち付き合わなくていいぞ姫。
しかもろ棒読みだぞ。

「ふん、付いて来い」

「へいつ」

姫も下っ端みたいになってきたな。

え〜と、ここどこよ？

普通学校の課題って補習室とかでやるもんじゃないの？

「志摩さん、何故に学校出て登山しなければならないのですか？」

「じき分かる」じき分かるって…

もう頂上着いたぜ？

「ふむ、ここならいいだろう」

何がですか？

「出てこい。」

そこにいるのは分かっている」

…志摩さん、ついに壊れたか

『キシヤアアアア』

キヤアア！

悪・夢・再・臨

また出てきた。

あの気持ち悪いの。

でも前とちよつと違う。

眼球はちゃんとあるし。

筋肉がすごい。

まあ気持ち悪いことに変わりないが。

「ふん、貴様の気を感じたからな。

人目につかない所までわざわざ来てやったぞ」

気、って…

志摩さん、あんた何者？

『キシヤアアアア』

「そうか、なるほどな。だが何故だ？」

…もしかして化け物と会話してます？

『キシヤアアアア』

「そうか」

やっぱしてるよな。

『キシヤアアアア』

「来るぞ！

構えろ！」

…でなんであんたは脇によける？

「これは罰だからな。

私がいったら意味がない」

「
…」

まあ啞然とする他ないよな。

こんな化け物と闘うのが罰だなんて。

『キシヤアアア』

やばっ、来た。

って姫の存在忘れてたあ。

化け物は姫の方へ向かう。

「へ？」

姫は突然の出来事に身動きとれない。やばい。

「受け取れえ」

志摩さんが姫に向けて長刀を投げた。

…絶対志摩さんって姫の名前知らないよな。

姫は長刀を受け取ると爪を繰り出してきた化け物をうまく受け流した。

姫ってなぎなためっちゃ強いんだっとな。

「生島ア、ぼおっとするな。

あいつは木製だから防御しか出来ねえ。お前が片付けろ」

…やっぱ名前知らねえな。うん。

お、化け物がこっち来た。

しゃあねえ

俺は爪を繰り出してきた（めっちゃワンパターンだな）化け物を軽く避けて剣撃を与える。

スパッ

ぬおっ、めっちゃ切れ味いいじゃん。

軽く斬ったつもりなのに相手の片腕と片翼がバツサリ斬れた。

『キシヤアアア』

うんうん。

痛いだろ、さすがに

終わらせてやるよ。その苦痛。

俺はスツとふところに入り袈裟掛け（けさがけ）に斬った。

『キシヤアアア』

化け物は断末魔の悲鳴をあげて逝った。

「ところで志摩さん。

化け物と何話してたの？」

下山しながら聞く。

「ん？」

生島を狙う理由を聞いたんだ」

「へえ、なんて？」

「なんでもその剣は遺跡で発見されて大層貴重なものらしい。
んでそれを取り返しに来たってわけだ」

「なるほど」

正直嘘だと思うよ。まず送り込まれるくらいの下っ端が詳しい事情
知るとは思えねえし、
大事なものなら武力行使する必要がない。

おそらく送り込んだ奴は剣の特性を知っているんだろ。
持ち主から離れないって特性を…

まあなんにせよ今は気にしてもしやあねえ。

それより…

「志摩さん、姫の名前知らないでしょ？」

「ギクッ」

…たまに志摩さんって古いよな。

「本当ですか？
先生？」

姫が問い詰める。

「知ってるさ…… 新島姫子だろ？」

お？知ってたんだ。

「じゃあなんで名前よばねえの？」

「なんか、恥ずかしいんだよ。
女の名前呼ぶの」

なんじゃそりゃ？

「なんでですかあ？」

姫が聞く。

「私はほとんど男とつるんでたからな」

たしか学生時代は不良集団の頭だったっけな。
まあ分かる気がする。

「と、とりあえず帰るぞ」

お～お～

めっちゃ慌てちゃって。

「志摩先生って結構かわいいね」

ボソツと俺だけに言う姫。

「あ、ああ」

かわいいって…

「おおい！
生島ア、新島ア。
早く来い」

「へ、へいつ」

なんとなくだけどこれからは姫も一緒にいじめられるんだろなあと思った。

3話：化け物倒そう！いじめられ仲間が出来た日！

（後書き）

まだ不慣れなため文章がおかしいところもありますが、多めにみて
やってください。

4話：変人の思いつき（前）

V S 幼なじみ（前書き）

苦手なバトル描写に挑戦です。

4話：変人の思いつき（前） VS 幼なじみ

今日は火曜日。

いつもどおり10時に起床。

うん、予定どおり。

今日は気分がいいから俺の朝を紹介しよう。

まあたいしたものじゃないんだがな。

俺はまず顔を洗いに行く。

洗顔、歯磨きをした後は髪を整える。

俺って寝癖出来たことないんだよね。

体質だと思うけど。

だからワックスを軽くつけるだけ。

あくまで軽くね。

自然体が俺のモットーだから。

次は朝食だな。

俺は今一人暮らしだ。

親は母さんは他界して、父さんは仕事で家にいない。

ってなわけで自炊しているんだな。

只今の時刻１０時半。まだまだ予定どおり。

今日は洋風にしとくか。

卵をフライパンに落とす。

まあ料理風景は省略しよう。

そうたいしたものでもないし。

目玉焼きにパンという手軽な朝食を食べ終え、只今の時刻１１時。

あとは制服に着替えるだけだな。うん。

俺の家から学校までは自転車で１０分ちよいってとこだな。

だがのんびりしたい俺はめったなことがないかぎり徒歩で行く。

今日も例外ではない。

少し歩くと姫の家が見える。

姫のおばちゃんは最初こそ遅刻する俺を怒っていたが、
今では呆れたのか許したのか何も言っていない。

まあ俺は後者であってほしい。

「あ、北斗君。

おはよう」

「おはようございます」

「ちょっと待ってくれるかしら？」

「？ いいですよ」

なんだ？

呼び止められるのは初めてだ。

「姫〜！

北斗君が来たわよ〜！」

…は？

「分かったあ」

少しして出てきた姫。

「悪いわねえ。」

姫ったら珍しく寝坊しちゃって」

おばちゃんはいまいち状況を理解出来ない俺に説明する。
なるほどね。

「行くぞ、姫」

「うん」

おばちゃんに見送られ学校に向かう俺達。

「えへへ」

北つくんと一緒」

ニコニコ笑いながら俺にまわりつく姫に俺はチョップをした。

「いたあい。」

何するのよ!」

「お前はバカか？」

一緒に登校なら毎朝してるだろ。

それより2人一緒に遅れたら志摩さんが喜ぶだけだろが」

「はっ！

やばいよ。それは」

俺の予想どおり姫はあの日から何かしら志摩さんにいじめられるようになった。

まあ部活が違う分俺よりはやさしいが。

「うう、やだなあ」

自業自得じゃバカたね。

「とりあえず行くぞ。
授業出なけりやもつとひどくなる」

「う、うん」

「あ、美奈ちゃんだ」

学校に着き廊下を歩いていると前から国語担当の美奈ちゃんが見えた。

今は授業がないんだろう。

「姫ちゃん。

生島君はまた遅刻？」

「まあな。

それより美奈ちゃん、俺あとどれくらいサボれる？」

「んゝまだ当分はいけるわよ。
つてサボっちゃいけません！」

「ははっ。

じゃあ美奈ちゃんもう行くわな。

志摩さんの授業だから」

「え？気をつけてね」

志摩さんの怖さを知っているんだろう。
たしか小中高と一緒にだったらしいし。

美奈ちゃんは先生でありながらその人当たりの良さで生徒に人気だ。
だからみんな親しみを込めて美奈ちゃんと呼んでいる。

年は若いだらな。

見た目ハタチってとこだ。

で、今教室の前にいるわけだが…

「姫、ちょっとさがってる。あぶない」

「うん」

志摩さんのやりとりを見慣れてる姫はさっさとどいた。

ガラッ

「生島ア!!」

ドガッ。

ぬあっ、今日はめっちゃ速え。
ガードで精いっぱいだったぜ。

「ほう、新島もいるのか。

朝から仲良く私の授業に遅れるとは…
覚悟できてるんだろおな？」

「は…はい」

ええ、分かっておりますよ。
姫と一緒に遅れた時点で。

「ふつ、まあいい。生島も新島も座れ」

今何もないってことはあとがつれえんだよな…

「早く座れ！」

「「へ、へい」」

さて…クラブに備えて寝るか。

時間・場所が変わって今はクラブ。

何故か志摩さんはまだ来てない。

「ふうゝ今日は来ない

「生島ア」」

…願いはすぐに消えたよ。

見ると志摩さんは涙目の姫を連れてきている。
多分それで遅くなっただろう。

「今日は2人に罰を与える」

罰って言うよりいじめですよね？

今日は何人と戦うんだ？

「今日はこいつと戦ってもらうぞ」

ポンツと姫の頭に手をのせる。

ってかマジか？

「おおマジだ」

へえへえ。

「でも先生。

私北つくんとは…」

お、いいぞ姫。

「ああ、それなら…」

姫に耳打ちする志摩さん。

…ものすごい悪い予感がするんだが。

「分かりました」

予・感・的・中

え？

志摩さん何言った？姫の感じがいつぺんに変わったぞ。

「ふふつ、ならば異種格闘技戦、開始だ！」

異種格闘技戦ってちょっと間違ってるような。

ちよつとここで俺の剣道に対する価値観を述べていいか？

剣道ってのは『待ち』のスポーツだと思う。

相手のスキを待ってそこをつく。

どれだけ集中出来るかが問題だ。

まあでも攻撃する時が一番スキが出来やすいんだろうが…

これはなぎなたでも例外じゃないと思う。

なんでこんなこといきなり言うかって？

だって姫が開始と同時にすごい勢いで攻撃してくるんだよ。

その必死の形相から繰り出される攻撃に回避で精いっぱい。

つか明らかにリーチに差がありすぎるよな。

あつちは軽く俺の背丈ぐらいあるのに俺は腰くらいまでだぜ。

しかしその『待ち』のセオリーを無視した攻撃なんだがスキがない。こっちが回避してもすぐに体勢を立て直し、次の攻撃を繰り出してくる。

だんだん勢いついてきたのか早くなってくる。避けるだけでは間に合わなくなってきた。

喉元を鋭く突いてくる。それをなんとか避けて姫の手元を狙う。だがなぎなたを回転させそれをはじかれる。

攻撃は激しいが冷静。

一番やばい相手だ。

今度はこちらから攻撃を仕掛ける。

顔を打つふりをして胴体を狙う。

一瞬俺のフェイントに引かなかったが、すぐにはじき、そのままの勢いでこっちの顔を狙ってくる。やばい避けられない。

胴着を着てないから当たったら致命傷になりかねないぞ。

だが俺はギリギリで気づいた。

足がから空きだ。

俺は足払いをかける。

「えっ？」

さすがに予想してなかったんだろう。すってんと転んだ。

俺はすかさず体勢を立て直し、姫の手元を打った。

なぎなたは姫の手元を離れカラカラと音をたてころがっていった。

「一本だな」

俺は姫に竹刀をつきつけ宣言する。

…決まった。

「うう、卑怯だよ。足払いなんてぐすつ…んう」

ええ!?

なんでマジ泣き?

そんなに悔しかったんか?

「な、泣くなよ姫。…なんかおごってやるから。な?」

「ぐすつ…ほんと?じゃあ今度の日曜日ね」

「わかったから泣くな。な?」

「うん！」

今が嘘だったんじゃないかってくらいの笑顔。

ふう、とりあえずおさまったな。

んなら…

「志摩さん、終わったぜ」

「…」

俯いて何も言わない志摩さん。

「志摩さん？
どつたの？」

「…」

不気味だよ。

「…しろ」

「「はい？」」

見事にはもる俺達。

「2人とも勝負しろー！！！」

変なスイッチ入っちゃったー！！

ええっ！？

この展開ってもしかして次回へってやつか！？

「そうみたいだよ、北つくん」

心読むな！

「口に出てるんだよ」

あまりの事態に自分のクセを忘れてたぜ。

まあとりあえず…

俺と姫はビシッと指をさし、

「次回へ続く！」

…決まった。

「うがぁ、勝負」

台無しだよ。

4話：変人の思いつき（前）

V S 幼なじみ（後書き）

次回へ続きます。

バトル描写短い（汗）

5話：変人の思いつき（後） VS 変人（前書き）

続きます。

今回はバトル一直線で書いてみました。

5 話：変人の思いつき（後） VS 変人

前回のあらすじ

いつものように遅刻してきた北斗。

そしていつものように志摩の罰いしめを受けることに……しかも今回は幼なじみとバトルすることになった。

からくも勝利した北斗。

しかし2人の熱い勝負を見た志摩に異変が……！？

……まあこんなもんか。

さて今マジでピンチを迎えている。

目の前にはバーサク化した志摩さん。

いったい何があつたんだ？

俺は思わず竹刀を握りしめる。

言い忘れてたがこの竹刀はあの落ちてきた刀だ。

竹刀になれって言ったらマジになりやがった。

便利な刀だ。

鞘は刀を抜くと同時に外れる仕組みらしい。

さて……まずは話し合いだな。
平和が一番だ。

「志摩さん、ここは　　つつ!？」

話し合いに応じずいきなり攻撃してくる志摩さん。

マジ獣かよ。

しゃあねえ

「姫！　連携で志摩さん止めるぞ！」

「り、了解！」

まずは俺が攻撃を仕掛ける。

中段からのスキのない面打ちだった志摩さんはなんなく受け止めた。

しかし俺はあわてない。むしろこれが狙いだ。

「姫！」

姫がなぎなたを俺の脇から繰り出す。

うん、このリーチは便利だ。

しかし志摩さんはそれもなんなくかわし俺を蹴りつける。

「がはっ」

俺はあまりの衝撃に吹っ飛ぶ。
当然後ろにいた姫も。

痛つてえ。

人の蹴りの強さじゃねえって。

「大丈夫か？ 姫」

「……」

「お、おい姫！？」

ちっ、当たりどころが悪いのか気絶してやがる。

……

姫を傷つけやがったな？

いくら志摩さんでも許さねえ。

俺はフラリと立ち上がり、志摩さんを睨む。

「少し行き過ぎだぜ志摩さんよ」

俺はすごいスピードで志摩さんの懷に潜り込む。

頭1つ分くらいしか変わらないから少し膝を曲げるだけで容易に入れる。

俺が入ったことに気付いた志摩さんはバックステップで距離をとる。

……逃がすかよ。

更にスピードを上げてついていく。

距離が0になると同時に剣を振るう。

志摩さんはガードするが俺もそう甘くない。

ガードをそのまま押し切り志摩さんの体勢が崩れたところを蹴りつける。

ヒュツと志摩さんは飛んでいき壁にぶち当たった。

そういえば他の部員はどこいったんだ？

俺の疑問は長く続かない。志摩さんは普段も充分強いが、相手からの攻撃をもろにくらうとキレル。

最初剣と一緒に落ちてきた化け物はキレた志摩さんに瞬殺されたからな。

案の定起き上がった志摩さんは今までとは比べものにならないスピードで距離を縮めてくる。

そして距離が0になると蹴りを繰り出す。

やばい、これはやばい。

空気の切れる音が耳に届く。

本能が告げる。

これはくらってはいけない、と。

直感で避ける。しかし志摩さんはその勢いのまま回し蹴りを放つ。

俺はさっきの姫のように志摩さんの軸足に足払いをかけた。
決まったかに思えたが信じられないことに志摩さんはジャンプして
それをかわし、踵落としの体勢に入る。

ウソだろ？

どんな空中バランスだよ。

とつさに後ろに飛び退いた。的を失った志摩さんの攻撃はそのまま
床にはいる。

ドゴンと音を立てて床を破砕された。

これは……長期戦は厳しいな。

こっちは一発で終わりのな分集中力を途切らすことができない。

そう思った俺は足に力を溜めて一気に距離を詰めた。

次はフェイントを織り交ぜて攻撃する。面打ちをするフリをして床
にたたきつける。

志摩さんはそのスキを見逃すはずなく正拳突きを放つ。

しかしこれが俺の狙いだ。

俺は棒高跳びの要領で飛び志摩さんの背後に着地する。そしてすぐ
さま突きを繰り出す。

正拳突きで体勢を崩した志摩さんは俺の攻撃をもろにくらう。

しかし今度は吹き飛ばされることなく受け身をとる。

そして勢いよく反撃してくる。

俺は慌てず繰り出された拳をかわし、その腕を利用し一本背負いする。

竹刀は床に落とした。

志摩さんはボタンと床にたたきつけられた。

意外といけるんじゃない？

って思った俺が甘かった。

急に動き出した志摩さんはすぐに立ち上がり、更に早くなった拳を繰り出した。

やばい、避けねえ。

そう判断した俺はとつさに腕を交差させガードする。

ぬあつ、痛つてえ。振動がハンパなく、俺の腕はしびれを通り越してうごかねえ。

……これは当分うごかねえな。

つか竹刀持てねえ。

肉弾戦は苦手なんだが……

俺はとりあえず飛び退いて距離をとる。

しかし志摩さんはさっきの俺と同じく追撃してくる。

俺はそれを避けカウンターのように回し蹴りを放つ。

横っ腹にくらったかにみえたがすぐに間違いに気付く。

志摩さんは俺の足をがっちり受け止めていたのだ。

……か、片手で俺の足を。
信じらんねえな。

くそっ、動けねえ。おそらく終わりだな。

志摩さんは思いきり振り回し、俺を投げる。

ちっ、負けちまった。

俺の意識は床にぶち当たると同時に途切れた。
床に当たりワンバウンドしたのを感じながら。

うん……

俺の意識が覚醒した。

どうやらそんなに気絶していなかったようだ。

柔らかいな。

志摩さん、珍しく保健室に連れていってくれたみたいだ。

目をあける。

……

なんで目の前に姫の顔？

……よし落ち着け俺。

まずは状況把握だ。

俺はまだ志摩さんと戦った場所にいるみたいだ。

そして……

これが重要なんだが……俺はうつ伏せに大の字に倒れている。
下には姫がいる。

なるほど、さつき柔らかさ姫の体だったんだな。

……

待て待て待て待て

やばい意識したら更に柔らかさが……

って俺は何を考えているんだああ！！

しかし……

胸越しに伝わってくる特に柔らかい部分。

大きすぎず小さすぎず。

俺の脳内鑑定人も唸る逸品だ。

やばいって……

あまりの出来事に混乱して俺のキャラが崩れた。

しかし姫ってこう見るとマジ可愛いな。
ジイツと見ていると姫が目を覚ました。
いやいやいやいや

やばいって俺の貧相なボキャブラリーで今の状況を説明出来ないって。

とりあえず飛び退く。

「あれ？ 私…… っていうか今北つくん私の上に乗ってた？」

早速核心ついてきたああ！！

やばい、もう下手に言い訳するよりそのまま言った方がいいな。

「ち、違うぞ姫。」

これは……さつき志摩さんに投げられたんだ！ 俺も意識失ってて
今日を覚ましたところで」

「やっぱり乗ってたんだ……」

な、なんだ？

怒るか？ 泣くか？

「もう、私がいくら魅力的だからって寝込みは卑怯だよ」

はあ？

なんかあたふたしてたのが一気に収まった。

うん、とりあえず事態は解決したな。

「それよりも志摩さんはどこ言っただ？」

この際まだ頬に手を当てて体をくねくねさしてる姫はほっとこう。

「ありや？ 北つくんまさかのスルー？」

うるせえ

「あ、北つくん。

あそこに書き置きがあるよ」

ほんとだ。どれどれ？

『生島、新島、私は職員会議があるから先に行くぞ。

まあ2人仲良く寝てたからほうつておいて大丈夫だと判断した。
よっぽど私の罰で疲れたんだろ。

何故か私もすつきりしたぞ。

では、気をつけて帰るように！』

……あの人バーサク化した記憶ないんだな。

すつきりしたのはあんだだけ暴れたからだぞ。

「まあいいか。

姫、帰るぞ」

「うん、それよりね北つくん、今度の日曜日……」

「分かってるって」

ポンスと頭に手を置いた。

「絶対だよ？」

「はいはい」

うるさい姫に適当に返事し俺達は家路に着いた。

……俺って今回やばいを連発してたな。それほどやばかったんだな。
うん。

色々な意味で。

「先程アメリカに向かわせた戦闘用Gの消滅を確認。
これで3体全て消滅を確認しました」

都会のとある一角。2つの影が会話する。

「そうか、しばらく様子を見ることにする」

「わかりました。

それと……志摩財閥が不審な動きを見せております」

「そうか……だが今は様子を見る他ない」

「分かりました」

会社の最上階の会話だった……

5話：変人の思いつき（後） VS 変人（後書き）

後半はバトルとは言えませんね（汗）

6話：ファンタジックに始動 わけわかんねえ by 北斗

今日は日曜日。

普段ならのんびりと過ごすところだが姫との約束で近くのデパートに足を運んでいる。

しかしほんとに女って買い物長いのな。

開店と同時に来てかれこれ3時間は歩き回っているぞ。

「姫、そろそろ飯にしようぜ」

「ん？ そだね。

何おごってもらおっかなあ」

「ええっ!？」

俺がおごんの？」

「あつたりまえじゃん！ そのために来たんだよ？」

……そついえばそつだった。

「忘れてたの？
しょうがないなあ。じゃあそのカフェテリア行こ」

うん、このスパゲティうまい！

味付けが絶妙だな。

「ふふっ、よっぽどおいしいんだね！
そのスパゲティ。

夢中で食べちゃって」

「うん、これマジうまいよ！ 食う？」

そう言ってフォークにスパゲティを巻きつけて差し出す。

「え？」

恥ずかしがる姫。
なんで？

…… ああ、たしかにこれはあれだな。

『あゝん』って言って食べさせるやつだな。

「悪いな、姫。

さすがに恥ずかしいか」

フォークを戻す俺。しかし姫はパクリとフォークを追ってスパゲティを食べた。

「ん、おいしっ」

モグモグと笑顔で食べる姫。

……なんかこっちが恥ずかしくなってきた。

なんか久しぶりだなこんなほのぼのとしたのは。

いつも志摩さんにいじめられたりしてたからな。

そつえば今週はすごかったな。

火曜日はバーサク化した志摩さんと戦ったし。

木曜日は志摩さんの機嫌が悪いつて理由で部員15人にやらされたし。

過去最高だったな。

そういえば火曜日に部員いなかった理由がすごかったな。

なんと志摩さん、俺達の試合を見せ物に金をとってやがった。

……教師ってそういうのいいのか？

「北つくん？

ぼおっとして……

どおしたの？」

「ん？ ああいや、なんでもないよ」

「ほんとに？

ああ、ほっぺにソースついてるよ」

姫はそう言って俺の頬をナプキンで拭った。

「お？ わりいな」

「まあ、ぼおっとしすぎだよ？？」

「お前に言われたくないなあ」

「なんで〜？
もぉ！」

ぷくつと頬を膨らませる姫がおかしくて笑ってしまっ。

「なんで笑うのよ？ ふふふっ」

姫も笑い出す。

「「あはははっ！」」

あゝほんとのどかだ。
心地いいや。
ずっと続けばいいのに。

「「生島北斗！！」」

……続くわけねえな。

「誰だよお前ら」

とりあえず俺は率直な疑問を述べる。

3人の男がこちらを睨んでいた。

全員うちの制服を来てるじゃねえか。

「我々は！」

あゝなんかめんどくさいのが始まりそう。

「新島姫子ファンクラブ会員NO・22！
石原勇！」

「同じく会員NO・35！ 岡島進！」

「同じく会員NO・41！ 橋本大樹！」

微っ妙っ！

普通こういうのって会長とかが出るもんじゃねえの？
つかファンクラブの人数多いな。

「3人揃って」

「3人揃って……」

なんも考えてなかったんだな。

さあなんて言うんだ？

「生島北斗！ 我々は許さない！」

……え？ なんも言わねえの？

「貴様はいつもいつも姫子さんと一緒にいやがって！」

……

「我々の姫子さんを毒牙にかけるその所業！」

「私はあなた達のものじゃありません！」

……

「「許し難い！」」

……

「ふふふ、怯えて声もでまいか」

「……んだ」

「「ん？」」

「3人揃ってなんなんだああ!!」

「「ぬああああ」」

あまりにも気になった俺は3人をぶっ飛ばした。

え？

なんでって？

俺中途半端嫌いな

「なんだっただよあいつら」

「さあねえ。

でも面白かったしいんじゃない?」

「まあそれもそうだな」

ふう。

まあでも今日の騒動はこれで終わりだな。

ど「おおおんー！

もおなんだっていうんだ？

俺の生活に平穩はないのか？

しかもこの音は……

「姫逃げるぞー！」

「え？ え？

なんで？」

「いいから！

早く！」

一刻も早くこっから逃げねえと。

一目散に逃げる俺達。

だか運命は無情だった。

派手は音をたて俺達の目の前にぶっ飛んできた化け物。

……ん？

ぶっ飛んできた？

みるとその化け物は多大な血を流して既に絶命していた。

なんで？

「お？ 悪い悪い。
ちよつと力の抑えが足りなかったみたいだ」

振り返るとそこには槍を持ったイケメンの兄ちゃんが。

……つて槍！？
なんで？

「お、これはかわいいお嬢さん。どうか俺と一緒に
Shall we dance?」

……え〜〜

どこの里の口説き文句だよ。

「あはっ、あはは」

姫もひいてるよ。

うん。っていうか

「誰よ？ お前」

「男に名乗る名前はない」

……なんだこいつ

「あなただれ？」

姫が聞く。

「これはこれはお嬢さん。

私の名前などあなたの前では詮無きもの。 ですがどうしてもというのなら……私の名前は 水橋 望でございます」

あゝなんかこいつぶっ飛ばしてえ。

「そうですか……

んじゃ」

姫の手をひきその場を去ろうとする。

関わり合いになりたくない。

「……さてよ」

急に雰囲気が変わった水橋（だったよな？）を不信に思い振り返るとすぐ近くに水橋が迫っていた。
槍を振りかぶりながら……

「つつ！」

反射的に刀で防ぐ。

「ほお、やっぱりお前のその刀か……」

「なんの話だ……よ！」

槍を弾き返す。

「お前何も知らないんだな……まあいい。
もっともすぐに会うことになるがな」

今日は見逃してやる。

どういうことだ？

「ふん」

水橋はそれだけ言うと消えた。

……つて消えた！？
どうなつてんだ？

「痛った〜」

なんでマンホールの蓋が開いてんだ！」

地下から聞こえる声。

つかベタだな。

本気で悩んだ俺がバカらしいよ。

「帰るぞ、姫」

「え？ うん」

俺達はその場をあとにした。

「面白い人だったね。 お笑いさんかな？」

絶対ないって。

目がマジだったもん。

俺達は今ちようどデパートを出たところだ。

ちなみに手はまだつないでる。

だって姫のやつすぐに別の買い物しようとするからな。

今日はもう何も巻き込まれず家に帰るんだい。

「チョットスミマセン」

もういいって……

無視無視無視。

「OH！ チョットスミマセン！」

無視無視無視

「すみませ〜ん」

……

「てめえ日本語喋れるじゃねえかあ！」

しまったああ！

つつこんでしまったああ！

…… もういいよ

「何？」

ぶっきらぼうに聞く。

「ココデナニカアッタンデスカ？」

「普通にしゃべれ」

読みにくいだろ。

「ここで何かあったんですか？」

デパートとを指して言う。

めんどくせえな

「あゝ変態が少し暴れたただけだ」

あながち間違っていないよな？

「OH！ソレハスゴイ
しつけれ」

「……すいません」

「うん、まあそういうことだ。んじやな」

もう何も起こりませんように。

「だあゝ。

やっと着いた」

只今姫の家の前。

本っ当に疲れた。

「今日はありがとうね、北っくん。
とっても楽しかったよ!」

うん、俺はとっても疲れたよ。

「またいこうね!」

「おう!」

まあなんだかんだで楽しかったしな。

「んじゃまた明日ね！ 遅刻したらダメだよ！」

お前は元気だなあ。

「わかってるよ」

よし、後は徒歩1分の家路だけだ！

姫が家に入ったのを確認し、自分の家に向かう。

今日は疲れたなああ。

トトトトトトトト！

「い」

ああ

「くう」

あああ

「しいゝ」

うあああああ

「まああああ！」

近所中に響きわたる志摩さんの声。

.....

..... 誰か殺してくれゝ!!!!

「大変なことが起こりました」

都会の一角のビル。

「どうした」

「3人が一点に集まっている模様です。志摩財閥を少しあなどって
いたようです」

「何？　そうか…新しく送った戦闘用Gは？」

「全て倒されたようです」

「ふむ……よし次のGをこのビルから分かるように出せ」

「は？　それはどういう……」

「こちらにおびき寄せて一網打尽にする」

「はっ、わかりました」

「だあ。」
「もおいやだ」

とりあえず志摩さんのわがまま（一人ひとつまでっていう店のサービス品を買ったために電車で5駅先まで付き合わされた）を聞き帰ったのが5時半。

もいろいろありすぎて疲れた。

んあ？
ここどこだ？

見渡す限り真っ暗。
これはあれだ、夢だ。

『夢ではないぞ』

野太い声が響く。

はあ？

『ここは亜空間。いや、貴様の心の中だ』

俺の心の中ってこんなに暗いの？

『心はだれしも同じようなものだ。自分を隠したい、偽りたいと思う表れだ』

へえ。

んで何？

『私は何も干渉できない。したがって曖昧なヒントをおくるしかない』

はあ……

『いいか？ よく聞け。貴様の運命はあと数日で大きく変わる』

……あつそ。

『むう、軽いやつだ』

ありがとうございます。

『ほめたのではないのだがな。しかしお前ならやってくれるかもしれない』

……何をかは知らないけど俺はやるぜ。

って決めてみる。

しかし、運命が変わるか。
まあ楽しけりゃいいや。

そして俺は再び意識を失った。

7話：ファンタジックに説明

だから意味わかんねえ

b y 北

はい、そういうわけで今日は火曜日なんですネ！

……… すいません、キャラ壊れてました。
あらためて今日は火曜日。

そう、俺が遅刻する日だ。

ただ言っておきたいのはだな。

俺はいつも遅刻してるわけじゃないってことだ。

あくまで月に2・3回程度。

たまに行かないとマジ単位やべえからな。

といっても俺は今家にいるわけで。

まあ今月入って3回目だからまだ大丈夫。

そつえば夢で運命がどうか言ってたな。

まだなんも起こっちゃいないけど。

さて朝の支度して、っと……

毎度おなじみ教室の前。

いつも心の準備しないと入れないからな。

ドアに手をかけ開ける。

すぐに構えた俺だったが予想外に何もとんでこない。

？ 志摩さん今日休みか？

「おおつ、生島。
やつと来たか」

俺の予想は外れたわけだが……
なんでそんな志摩さん笑顔？

「早く入れ。」

え、みんなに紹介する。生島北斗君だ」

はい？ 意味が分からねえ。

「志摩さん？

何言ってるの？」

「転校生が来たんだ」

なるほど。

で、なんで俺を紹介する？

「さあ、生島。

自己紹介だ」

「はあ？ なんで俺がそんな

「やれ」「

うっわ、いつもより3割増し怖ええ。

「い、生島北斗です」

あゝこれいつもよりつらいわ。

みんなクスクス笑ってるし。

まあそら自己紹介つてのは転校生がするもので、こっち側は個人での紹介が普通だからな。

「生島に質問あるか？」

ふっ、甘いな志摩さん。 今どきの子はシャイだから自ら手を挙げることは……

「「はい！ はい！」「」

……元氣爆發じゃねえか。
てめえら小学生のノリだぞ。

くそつたれ。

こうなったら全てに応えてやる。

「好きな食べ物？」

「ご飯に合うもの」

「好きな歌手は？」

「いません。 適当にいい歌を聞いてます」

「趣味は？」

「体動かすこと」

「好きな女性のタイプは？」

「明るい、優しいやつ」

「姫をなんで好き？」

「明るいいし、いつも笑顔だからな」

……ん？

最後の質問なんだああ！

思わず応えちまったじゃねえか！

質問したやつは……

姫、貴様か。

「誕生日は？」

まだ続くのか？

「10月 10日だ」

「好きな場所は？」

「静かなところ」

「自分を動物に表すとしたら？」

……なんだこの質問？

「え〜と、ヒヨウ」

「Can you play カバディ？（カバディできますか？）」

「No I can't（いいえ、できません）」

誰だあ！ 英語で質問したやつ。

思わず英語で応えちまったじゃねえか！

質問したやつは……

げ。

日曜にいた変な外人だ。

「志摩さん、転校生つてもしかして……」

「ん？ おお。」

そこにいる金髪と、あっちにいる黒ロングだぞ」

わあ、なんかいろいろ予想してたけどほんとに俺のクラスに日曜の

騒動の原因2人が転校してきやがった。

「はあ」

「ん？ そんなにショックだったか？」

「はい」

ここは素直に応えとこつ。

「そうかそうか。
ならもういいぞ。
それと……」

俺にボソツと言う志摩さん。

「昼休み始まったらすぐに屋上に来い」

うん、この学校の屋上って閉鎖されてるはずなんだけど。

「ありや？」

北つくんも呼ばれたの？」

昼休み。

すぐに屋上に上がった俺は姫とあつた。
その口ぶりだと姫も呼ばれたらしいな。

「嫌な予感」

「ねえねえ、それより北つくん」

なんだ？

姫のやつ今日は激しくまとわりついてくるな。

いつもは腕なんだが今日は首だ。

「なんだ？ うつとうしい」

「えへへ」。

今日の自己紹介のことおぼえてる？」

「そらまあ、30分ほどしか経ってないからな。」

「なんでだ？」

「んじゃあ私の質問もおぼえてる?」

……そこ来たか。

「まあ、おぼえてるっちゃあ、おぼえてるな」

「にやは。」

北つくんは「私の笑顔が好きなんだよね」

満面の笑顔で言う姫。

……やばい。

かなり恥ずい。

思わず顔をそむけてしまう。

「あつれ?」

どうしたのかなあ?」

そむけた先に顔をのぞかせる姫。

近いって。

つうか誰か助けてくれ。

「生島ア！！」

初めて志摩さんが神に見えましたあ！

助かった。

志摩さんは転校生2人を引きずってきた。

……なんで引きずってんの？

「ああ、それはな」

あ、口に出た。

「2人とも私が呼んだんだがこっちの金髪は学校の中うちよろしながら『OH！ニホンノブンカハスバラシイデース！』とかほざいてて、こっちのアホロンゲは女口説いてたから殴って連れてきた」

バカばっかじゃねえか。

「んで志摩さん、いったい何の用？」

「ああ、その前にだな……活！」

志摩さんはなんかよくわからんが気合いで2人を起こした。

「こいつら2人に自己紹介してもらおう。お前まだ知らないだろう？
一回会ったらしいが」

それはあんたのせいだけだな。

……いや、遅れた俺が悪いんか。

つかかなんで一回会ったって知ってたんだ？

「じゃあまずアホロンゲから」

「アホロンゲって……。まあ俺は水橋 望、
それより姫さんから離れる！」
槍の担い手だ。

そういえば姫がひつついてるの忘れてた。

まあ俺が悪いわけじゃないと思うのだが。

「いや!-!」

なんで拒む? 姫よ

「くつ、貴様ごときが」

俺ごときがなんだよ?

たしかにあんたイケメンですけどね!
背も高いし。

俺が174だからあいつは大体180ちょいだな。

「はい、もうそんなの後々! 次!」

「ワターシ

「それもいい」

「……私の名前は良平・T・マグズカルトです。父がアメリカ人なのでハーフです。5才で日本に来て、つい最近までアメリカに留学していました」

……複雑だな。

「あ、ちなみに銃の担い手です」

「なあ、志摩さん。さっきから言ってる担い手ってなんなんだよ？」

「それを話すために呼んだんだ。
まずお前、私が大財閥の1人娘だってことは知ってるな？」

……は？

「ごめん志摩さん。もう一回言って」

「だから大財閥の1人娘だ」

……

「「えええええ！！？」」

見事にハモった俺と姫。

つか、え？ マジ？

初耳なんだが……

「知らなかったのか？ まあいい。
それでその刀の経緯を調べたんだ。
いきなり落ちてきたんで気になったからな」

志摩さんはそこで一息ついた。

「どこから出てきたのかは分からなかったが、その刀と同じように
空から落ちてきたという目撃情報があった。

それでその2人が情報の中心だったからここに呼び寄せたんだ」

なるほどね。

まあわかるようなわからないような。

担い手ってつまりその武器に取り憑かれた奴のことなんだな。

「分かった。

でもなんで姫も？」

「ああ、新島も刀について深く関わったようだからな」

あんま関わってないような気もするが。

「まああまり詳しいことは分かってないがな」

つまり現状で分かっているのは武器の種類が3つってことだけか。

あ、あと誰かがこれを狙ってるってことだな。

あの気持ち悪いのを送り込んでくる奴らが。

『キシヤアアアア』

そうそう、こういうのが……って嘘お!?

「こんなところまで」

場所選べよ。場所！

「ちっ、姫下がつてろ」

相手の数は3か。

こっちの担い手の数を知っているようだな。

ってことは相手もかなり大企業のような。

「行くぞ！ 良平」

水橋はそう言って走りだす。

俺忘れられてないか？

「ちょっと待て！

俺もいく！」

自己主張してみる。

「黙って見とけ。

まだ2つ目を『教え』てもらってもないやつは邪魔だ！」

なんだ？

『教え』？

「ちつ、なににも知らないようだな。

ならば……」

水橋は化け物の攻撃をくぐり抜け槍を刺した。

そして叫ぶ。

「燃え盛れ！」

すると槍の穂先から炎をあげて化け物を焼き尽くした。

……すげえ。

「こつちも負けてられませんか！」

今度は良平が銃を構えて叫ぶ。

「水の包容！」

銃身から飛び出したそれは化け物に当たると同時に水が広がり球状になり化け物を囲った。

そしてもう一度叫ぶ。

「鉄砲水！」

銃から勢いの強い水が何度も発射される。

化け物は蜂の巣になり果てた。

すげえ。

でももう一匹は？

「絶対破滅拳！」

もう一匹はまた名前の変わった志摩さんの技で消えた。

……マジで消えた。

「ふっひゃあ。

みんなすごいね！」

奇妙な声を上げる姫。

だがまあすごいな。

俺もこのままじゃな。

……って決めてみるけど俺何すりゃいいんだ？

「おい！ 生島」

水橋から声がかかる。

「貴様せめて2つ目は使えるようになれ。でないと姫さんを守れないぞ」

だから2つ目って何？

……まあたしかにこのままじゃ姫を守れねえな。

なんとかしねえと。

そう決意した日だった。

8話：開幕！！

「敵のアジトが見つかったぞ！」

S H Rを終えて呼び出された俺達に志摩さんはいきなり言った。

アジトって……

「んで？ どこ？」

「有馬製薬会社だ」

まあ予想はしてたけどエラく立派な会社だな。

たしか世界にも支社をいくつも持っているって話だ。

なんでそんなところが俺達を狙うんだ？

「志摩さん、よく分かったね」

「ああ、この前来た化け物がそのビルから出たっていう目撃情報があつたからな」

……なるほど。

これはおびき寄せてるな。

3人が揃ったから一気に決着つけようって魂胆か。

「北つくんつてたまにするどいね」

おっと口に出てたか。

つか

「たまにつてなんだよ。たまにつて」

すると姫はジト目になって

「ふゝんだ」

なんだ？　なんかム力つくな。

まあ話を戻そう。

そして後ろで

『俺も姫さんにのんちゃんとか呼ばれたい』とか言ってる
アホロンゲはほっこり。

「んで、いつ襲撃するの？」

姫、襲撃って……

「うむ、できれば夜だな。あまり関係のない人を巻き込みたくない」

見る、志摩さんノリノリになっちまったじゃねえか。

しかし夜か……

ぶっちゃけめんどくせえ。

って言ってられねえんだよな。

全ては平穏を取り戻すために。

もう一度言おう。

全ては平穏を取り戻すために……！！

……うん、決まった。

「それじゃ、日曜日だな。今日はこれで解散だ」

俺達は解散しようとして……

「生島、ちょっと来い」

俺だけ呼ばれた。

「なんすか？」

「いいか、たしかにお前は2つ目を使えない」

……たしかに、な。

結局何も起こらないままだった。

「だが、忘れるな。お前は強くなる、敵を倒すということが目的ではないはずだ。覚えておけ？
自分の本分ってやつを」

「わかりました」

……俺の本分？
なんなんだ？

「全員集まったな？」

草木も眠る丑三つ時。

ってやつか？

とりあえず辺りは人の気配が全くない。

集まっているのは俺、姫、志摩さん、水橋、良平の5人だ。

「なんで姫も付いてくるんだ？」

「別にいいじゃん。邪魔しないから、ね？」

思わず顔を背けてしまう俺。

理由は……わかるよな？

「くそ、なんで生島ばかり」

後ろで呟いてるアホロンゲはほっとく。

「さて、行くぞ！

野郎ども！ + ！」

うん、姫のことだな。

つか忍び込むのにそんなに大声出していいのか？

「気にするな。ノリだ」

はいはい。

なんだこりゃ？

人が誰もいねえ。

そりゃ警備は何人がいたが防犯装置の類は一切なかった。

おびき寄せたならそれなりの対応があるはずだ。

……まあ畏つてのが無難だな。

「畏なら踏み潰すまでだ！」

さいですか。

マジでノリノリだな。

しばらく階段を上がったり走ったりしていると大きな、そう体育館

くらいの大きさのフロアに出た。

「なんでこんなところあるんだ？」

「それはわざわざあなた達のために用意したんですよ」

奥から響く低い男の声。

「そう、ここがあなた達の墓場になります」

「んだところ！

上等じゃねえか！」

志摩さんガラ悪！

「強がるのはこれを見てからにしてはいかがですか？」

パチツと指をならすと共に、

『『キシヤアアアア』』

きやああ！

気持ち悪いのがいっぱい。

「ちっ、うるせえのがぞろぞろと」

そういつて槍を構える水橋だが良平がそれをとめた。

「待ってください。ここは私がいきます」

「だがさすがにこの数は1人ではキツイだろ？」

たしかに

「いいえ。

私のこれは対複数のものなんです。

あなた達がいるとかえって足手まといになります」

「ちっ、わかった。じゃあ……生きるよ」

拳を差し出す俺に
合わせる良平。

「つつてもどうやってここを抜ける？」

うん、それが問題だ。

「ふっふっふ」

志摩さんがいきなり笑い出す。

「持っててよかった煙玉＋暗視スコープ！」

なんでそんなに用意いいんだ？

まあたしかに助かったが。

「行くぞ！」

ボンツと音をたて広がる煙。

「なんですか？
ごほっ、ごほっ」

煙がはれた時、俺達はすでに階段を上がっていた。

「さて、あなた達の相手は私デース」

良平vs化け物無数
戦闘スタート！！

「でも良平君一人残して大丈夫かな？」

「気にしてもしょうがない。

おそらくあいつらは頭潰せば動きがとまるはずだ」

だから早く上へいかなえとな。

また大きなフロアに出た。

「待っていたぞ」

案の定フロアに声が響いた。

こんどは女の声。

「みんな、ここは俺に任せてくれ」

水橋が言う。

魂胆見え見えだな。

「わかった。行くぞ、お前ら」

「生島！」

呼び止められる俺。

「お前、ちゃんと姫さんを守れよ」

お、珍しくマトモ。

「そう思っなら早く片付けてこい」

「ふっ、ちげえねえ」

俺達は拳を合わせる。

「行くぞ！」

階段へ走り出す。

「逃がすか！」

女は俺達の前に立ちはだかるがそれを水橋が後ろから抱きすくめる。

「駄目。あなたのお相手は俺です」

……変態が。

俺達はそのスキに階段を駆け上がる。

「何をする！ やめろ」

「うぬあ、そこは反則……」

後ろから聞こえる水橋の呻き声。

俺の背筋もゾワツとするその呻き声。

あれは男にしかわからねえな……

望vs女

戦闘スタート!!

「だ、大丈夫かな？水橋君……」

うん、不安になる気持ち分かるぞ。

「大丈夫だ」

志摩さんが応える。

「あいつらは一度手合わせしたから分かる。 やつらは負けんさ」

なんで闘ってんだよ？

「まあもつとも……だがな」

ボソツと言う志摩さん。

「ん？ 何？」

「なんでもないさ」

しばらく行くとまたお約束のようにフロア。

「えらく早い到着だな」

お約束のように響く男の声。

「なるほど、仲間を犠牲に来たか」

で、でかい……

階段へ続く道を防ぐようなその巨体。

「つつ、生島、新島。先行け」

「でも志摩さん。

あれどかせないと」

「任せろ」

そう言うと志摩さんは瞬時に巨体の横へ移動しその巨体を蹴った。

ドゴンと音をたて20mほど吹っ飛び壁にめり込む巨体。

すげえ。

「生島！ もし失敗してみろ。
今の10倍はいじめぬくぞ」

それは嫌です。

「忘れるな！

自分の本分を！！」

階段を駆け上る。

後ろからがれきの崩れる音がする。

相手も無傷のようだ。

無事でいてくれよ志摩さん！

志摩 vs 巨体

戦闘スタート！！

「みんな……みんな大丈夫だよね？」

かなり不安気に言う姫。

「大丈夫だ。

良平、水橋の強さ。志摩さんのめちゃくちゃさを知ってるだろ？」

「うん……」

「それより姫」

俺は走るのをやめ姫の方を向く。

「お前は絶対俺が守ってやるからな」

「う、うん！」

しばらくするとフロアに出る。

今度は下3つよりかなり広い。

「待ってたぞ」

響くしわがれた男の声。

「さあ、返してもらおうか、その神器を」

おそらく刀だな。

「返せるものなら返してるさ」

「それもそうだな。ならばひっpegすしかないな」

老人は一步下がるとパチツと指をならした。

すると天井に穴が空きそこから落ちてくる化け物。

しかもでかい。

『グオオオオ!!』

「姫！ 絶対離れるなよ！」

北斗vs超巨大化け物戦闘スタート!!

8話：開幕！！

（後書き）

やっと物語が動き出してきました。

9話：流れる水を味方につけて、良平の過去（前書き）

ちょっと見にくいです（汗）

9 話：流れる水を味方につけて、良平の過去

みなさんはじめまして。

良平・T・マグズカルトデス。

今の状況ははつきりいつてとてもやばいデス。

生島くん達を先に行かせるためとはいえいくらなんでも多すぎます。

「しょうがないデスネ」

ホルスターに手を伸ばし臨戦態勢にはいります。

「まさかあなた1人をお相手することになるとは……」

相手はかなりの数のモンスターとご老人。

「しかし、こちら仕事ですので全力であなたを殺します」

ご老人は指をまたパチンとならしマシタ。

するとモンスター達がいつせいに襲いかかってきます。

私はとりあえず横っ飛びに避け銃を構えます。

1発2発3発。

銃声と共にモンスター1体が倒れます。

残ったモンスター達は一瞬怯みましたがすぐにまた襲いかかってきます。

私はすぐに次の行動に移ります。

しかし……

しばらく逃げ回っていてモンスター達の行動を観察してみたのですが、あまりにも統率がとれてなさすぎデス。

いや、むしろ一匹一匹が我先にと私を殺そうとするのが分かります。その証拠にモンスターの攻撃が他のモンスターにあたることもしばしば。

『キシヤアアア』

！？

少し考えに気をとられすぎたみたいですネ。

腕に一撃をもらった私はそこをおさえながら飛び退きます。

傷はあまり深くないようデス。

困りマシタ。

私の武器はたしかにこういった状況に強いのですが、いかんせんモンスター一匹を倒すのに銃弾を3発以上消費するものですカラ……

そろそろ弾数も少なくなってきましたタ。

残りは10匹くらいですか……

私は退屈してマシタ。

日本にいてもアメリカにいても。

私の才能っていうのでしょうか？

11才の時にアメリカの有名大学によばれ行きましたが……

それでも私の退屈は変わりませんデシタ。

皆は私を羨望とも嫉妬ともとれる眼差しで見たいマシタ。

そこから得られるのは孤独のみ……

私はそんなものより友達が欲しかった。
ただの子どもとして過ごしたかった……

そんな私の人生に転機が訪れます。

2つの出会い。

そう、銃と志摩先生との出会い。

私が研究ラボにいと落ちてきた銃。

何故かは知りませんがすごく惹かれたのを覚えてイマス。

それと共に降ってきたモンスター！。

最初は無我夢中でしタ。

そしてその後現れた志摩先生。

はつきりいつてモンスターより怖かったデス。

しかし私の才能うんぬんより私自身を見てくれた人ははじめてデシタ。

そして私の生い立ちを隠してほしいと言った時、

『別にいいが、奴らはそんなこと気にしないと思うぞ。いずれにせよ言う時は自分で言え』

この言葉にとっても救われた気持ちになりました。

そしてはじめて前向きに物事を考えた時銃が光出しました。そして銃身に文字が浮かび上がってきました。

『式撃を放つは数多の水音』

そう

「鉄砲水!!」

銃身を飛び出した水がモンスター達を貫きマス。

本来ならそれで決着がつくのですが数が多いのもう一度叫びます。

「鉄砲水!!」

再び銃身を飛び出した水がモンスターの体に穴を穿ちマス。

「さて、あなただけになりましたヨ?

ご老人」

残ったご老人に言います。

おそらくですが、このご老人自体は強くないはずですよ。

これだけのモンスターを配置されるのですから。

「さすがにございますね」

ご老人は微動だにせず言います。

強がりでしょうか?

「強がりはいいいです。 退いてください」

「あなたはバイオテクノロジーについて詳しいはずですね？」

いきなりご老人が言い出しマシタ。

「ならば、こういうことが可能だということも分かるはずですよ」

ご老人は錠剤を吞みました。

するとメキメキと音をたてご老人の体が変異して行きます。

筋肉が膨れ上がり、角が生え、目が紅く染まります。

そう、まるで先ほどのモンスター達のように。

「なるほど、遺伝子の移し替えの類デスか？」

「さあ、どうでしょうね？ あなたはここで死ぬので関係ありませんよ！」

ご老人……いや、モンスターはすごいスピードでこちらに向かってきます。

先ほどのモンスターとは比べ物にならないくらいデス。

おそらく他の人体改造もされてあるんでしょう。

ご老人の繰り出した拳を紙一重で避けマス。

空気の切れる音が鼓膜に届きマス。

そんな拳をくらうほどお人好しではありませんので横に飛び、銃を構えマス。

1発2発

しかし銃弾はモンスターにあたり跳ね返りマス。

驚くヒマを与えてくれないスピードで次の攻撃を繰り出してくるモンスター。

少しかすってしまいましたタ。

頬の皮膚が切れ血が流れてきマス。

私は再び飛び退き距離をとりマス。

どうでしょうか？

『鉄砲水』はもう限界のようでは使えません。

「水の包容」

とりあえずモンスターの動きを止めますが、長くは持たないでショウ。

周りを見回し使えるものがないか探します。

……アレは使えそうですね。

ばしゃつと水の球が弾けマシタ。

私はモンスターをある場所まで誘導します。

ここで終わりにしまショウ。

私は床に3発撃ち込みマス。

先ほどの攻撃でボロボロになっていた床は銃弾により形を保っていらなくなりバラバラに下の階に落ちていきマス。

真上にいたモンスターも例外ではありません。

床に落ちたモンスターはそれでも苦しそうに息をしています。

……本当にモンスターですネ。

ですが……

「いくら皮膚が硬くても体内までは不可能なはずですネ」

私は残りのありったけの弾をモンスターの口に撃ち込みマス。

いくらか外れマシタが口より入った銃弾はモンスターの顔を貫通し、モンスターは動かなくなりマシタ。

ふう。

思わず座りこんでしまいマス。

しかし、こうしてる場合ではありませんネ。

私は階段に向かいマシタ。

私は出会ってまだ間もないですが、胸を張って言えマス。

私は立派な仲間を持ったと。

10話：逆巻く炎は闘志のように　く色々決着く（前書き）

今回は戦闘描写はあまりありません（汗）

10話：逆巻く炎は闘志のように　く色々決着く

どーも、みんなのアイドル水橋望です

今、俺の前には可憐で清楚で妖艶で……
もお言葉では表せられない美少女が

最初は強い奴探しにこのビルへ来た俺ですが……

ぶっちゃけどうでもよくなりました。

たしかに最初の金蹴りは堪えましたが、これも全て愛の試練ということにします

え？　いい加減戦えって？

わかつちやいないなあ……

女の子とは会話が基本。

初っぱなからそんなんじゃ嫌われますぜ。

つつことで……

「お嬢さん、お名前は」

まずは名前。

じゃないと会話が弾まないからね

しかし相手のお嬢さんはお構いなしにこちらに向かってくる。

俺は慌てずにその繰り出したパンチを受け止める。

あくまで受けとめる、ね。

だって会話したいじゃん？

そう思っていると相手の方が声を出す。

「稲葉 雫だ」

しずくちゃんね。

「えらく、素直だねえ」

「殺す相手には名前を名乗ることにしている」

ぶっきらぼうに応えるしずくちゃん。

でも……

「なんで嘘つくの？」

「な、何を……！」

俺はしずくちゃんの手を匂う。

「うん、やっぱり。手から血の匂いが全くしないよ。それに手もこんなにしなやかだ。とても人を殺していたとは思えないなあ」

図星なのか体をビクンと反応させるしずくちゃん。

うん、かわいい

「ほんとにイヤなんでしょ？
こんなことするの」

「うるさいー！」

はうあ!!？

またもらってしまった。

男にしか分からない痛み。

「ぬああ……。」

し、しずくちゃん。そこは本当に反則なんだよ？ 君は痛さを知らないからそんなことやれるんだろけどさ……。」

「黙れ!!」

怒った顔もかわいいよ

「ふん、貴様そんなことより周りを気にしたらどうだ?」

周り？

ん？

なんか糸みたいなのが……

「気付いたようだな……。それはワイヤーだ。

触れれば真っ二つだぞ?」

ふん、なるほどね……

俺はヒマだった。

まわりに強い奴がない。

大規模な不良集団と闘うために頭の女に手を出したのだが。

案の定俺の渴きは満たされなかった。

襲ってきた不良も雑魚ばかり。

頭ですら、カスとも言える強さだった。

そしていつものように街中でナンパにふけていた所……

空から槍が落ちてきた。

騒ぎに紛れて槍に触れたところ不思議な感覚におそわれた。

そして気付いた時には目の前に化け物が……

最初は未知の恐怖におそわれたのだが気付くと無我夢中で化け物を倒していた。

そして数日後に嵐のように現れた志摩姐さん。

早速口説いた俺だったが拳骨一発で一蹴された。

そして訳も分からず戦闘開始。

……なんで？

しかし志摩姐さんの圧倒的戦闘センスに徐々に俺も楽しくなってきた。

そして

『強い奴と戦ってみたくないか?』

この一言が俺の心を動かした。

強い奴……

俺は本当に久しぶりにワクワクした。

するとその時槍が光り出し、柄に文字が刻まれた。

『弑撃を放つは炎の雄叫び』

「甘いねえ、しずくちゃん。そんなことで俺の君に対する愛が消えると思っただけ?」

「何をバカなことを……。言っておくがその槍を振り回してもワイヤーは切れないぞ」

「たしかに丈夫そうだが、でも燃えたらどうなるだろうね？」

「何を……」

俺は槍の切っ先を地面にカチンと打ちつける。

「炎爆陣」

俺のまわりに火が燃え上がり、ワイヤーを焼き切った。

「そんな……！」

驚くしずくちゃんに再び抱きつく俺。

でも今度は首に槍の切っ先をあてることをわすれない。

「頼むよ。」

降参してくれ。

君を傷つけない」

くうう！！

決まったあ！！

かつこよすぎるぜ！俺

「……分かった」

ふう……なんとか片付いたな。

つていうか無血解決じゃん俺

「分かったから……離れてくれないか？」

「やだ」

だっていい匂いなんだもん

しかし……

「もしかして、恥ずかしいの？」

顔を赤らめコクンと頷くしずくちゃん。

ズッキュユン！！

やばい、今心臓撃たれた。

か、可愛すぎる

「もお、絶対離さない！」

「な、何を……！」

ふっ、今回の金蹴りは回避できたぜ。

ぎゅー。

更に強く抱きしめてみる。

バタバタともがくしずくちゃん。

ひとつひとつの行動が可愛すぎるんですけど……

「何をやっているんですか？ 水橋くん」

むっ、邪魔者来たな。

せっかくいい雰囲気だったのに。

「お早い到着で、良平君」

皮肉たつぷりに言ってみる。

「ええ、そうですネ。 さあ、早く行きますヨ」

あんま通じてないみたいだな。

「わかったよ。

しょうがねえなあ」

しずくちゃんに抱きついたまま器用に歩く俺。

「何やっているんですか？ その人どうするつもりですか？」

「連れてく」

「ダメデス」

「連れてく」

「ダメ」

「連れてく」

「ダメ」

「連れてく」

「「はあはあ」」

息をきらす俺と良平。

「なんでダメなの？」

「敵ですヨ？」

なんで連れてくんですか？」

「それは、あれだよ。え〜と……人質」

苦し紛れの嘘をつく俺。

「ナルホド」

ええ?!
信じた?

まあ、ラッキー。

つうわけで……

「まだ一緒にいれるよ。しずくちゃん」

何も言わないしずくちゃん。

「どうしたの？」

「……離して」

ボソツと小声でいうしずくちゃん。

でもそれがまた……

「可愛いー！」

ぎゅっと抱きしめる。

「何やっているんですか！？ 早く行きますヨー！」

……はいはい。

「ほう。」

私の『絶対破滅拳』をくらってなお動けるか……たいしたやつだ」

私の前には見上げるような巨体が。

そつ、私は今敵のアジトに来ている。

ここに来るまでに水橋と良平を……

そしてこの先に生島と新島を……

それぞれ行かせたが私は何も心配はしていなかった。

なぜなら良平はあれでしっかりしているし、水橋のスケベパワーはすごいからな。

まあ。

もっとも一番心配ないのは生島だ。

あいつは聞こえていなかったようだが、私がボソツと呟いた言葉。

『まあもっとも生島が一番強かったのだがな』

自覚はないらしいがあいつがあの人の中でずば抜けて強い。

ふっ、それもひとえに新島を思いやる気持ちか……。

「さあ、立つたらどうだ？ 死んでないのは分かっているぞ」

パラパラと瓦礫が崩れ巨体が持ち上がる。

「よくわかったな。俺の体は人体改造を重ね鉄より硬くなったのだ」

「ほう」

「つまりお前では俺を倒せないということだ」

そう言つて巨体は拳を繰り出してくる。

私は軽々と避け言う。

「なるほどな。」

どうやら嘘ではないようだ。

だが……私のが硬いな」

「何を戯けたことを」

「試してみるか？」

私は近付き拳を繰り出す。

「絶対壊滅拳！！」

すごい音をたて壁にぶつかる巨体。

「なるほどな……」

たいした威力だ……「ごほっ」

強がっていたようだが耐えきれなかったんだろう。
吐血し、倒れた。

「バカな……ガハッ」

地響きをならし事切れる。

「私の拳は鉄をも砕く！！ はっーはっはっはー！！」

「……何を高笑いしているんですか？」

「む。早いな。」

水橋、何を連れてきている？」

「人質」

はあ……。

まあやりそうな予感はしていたが。

しかし良平のやつ、私がせっかく余韻にひたっていたのに。

邪魔しやがって。

「な、何を睨んでいるんですか？
早く行きますヨ」

……ちっ。

「わかった。わかった」

さて残すは生島か……。

11話：守るために出来ること　～いざ異世界へ～

どーも、久しぶり。

生島北斗です。

えー……ざっと今の状況を説明しますね。

いきなり落ちてきた刀。

それを狙う企業に乗り込んだ訳ですが。

各階で刺客と遭遇、1人ずつ減っていき今は姫と2人になりました。

そして社長らしき人とも遭遇。

その社長が放ってきた超巨大化け物が今目の前にいるわけです。

……以上。状況説明終わり。

では本編に入ります。

『グオオオオ！！』

くっ、まただ。

化け物はさっきから一度もその場を動かず、黒い球体を放ってくる。
ぶっちやけ避けるので精いっぱいだ。

接近を試みようにもいかんせん距離が遠いためなかなか近付けない。

やばいな……

「姫、まだいけるか？」

「だ、大丈夫」

……かなりつらそうだな。

しかしどうしたらいい？

こうして考えている間にも化け物の攻撃の手はやまない。

この黒い球体、
けっこうな威力らしくあたった箇所は深く抉れてる。

ちっ、一撃もくらえないってことか……

「ねえ、北つくん、考えがあるんだけど」

「なんだ？」

「私がおとりになるからそのスキに斬ってよ」

たしかにそれが一番確実だな。

だが……

「ふざけるな。」

姫に何かあつたらどうすんだ？」

「でも……」

「心配すんな。」

なんとかするから」

とは言ったものの……

やまず降り注ぐ敵の攻撃。

どうにもかいくぐれそうにない。

攻撃には少なからず『回数』がある。

一度に何回までかが限界なはずだ。

げんに先ほどからも黒い球体は5回に一度空白がある。

つまり徐々に距離は詰まってもいいはずだ。

何故縮まらないか？その疑問は簡単だ。

その空白の時間があまりにも短すぎるのだ。

どんな体の構造してやがる。

「北っくん、私……もう限界」

「……?! がんばれ」

たしかに俺も限界近いな。

ちつくしょう。

志摩さんのいじめに匹敵する辛さだぜ。

……そういえば志摩さん何か言ってたな。

『忘れるな。
自分の本分を』

……本分？

俺の本分？

敵を倒すこと？

……否。

強くなること？

……否。

姫を……守ること？

……

いきなり刀が光出した。

そして刀身に刻まれる文字。

『弑撃を放つは形成す斬撃』

形……成す……斬撃？

どういう意味だ？

『簡単なことだ』

突如頭に響く声。

……ああ、俺もついにおかしく。

『なっていない。』

いつぞやの夢を覚えているか？』

ええ、あの運命がどうか言ってた方ですよ？

『そんなことよりいいのか？
お前もそやつも限界のはずだ』

じゃあなんで出てきたんだよ？

『ヒントをもう少しやろうと思ってな。
斬撃とはなんだ？

斬った軌跡だ。

それが形になるということは……？』

なるほどね。

つまり……

「こういうことか！」

俺は刀で空を斬る。

すると切っ先から紫色の衝撃波が生まれる。

刃状の衝撃波は化け物の放ってくる黒い球体をかき消してなお、形

を変えず化け物に当たる。

当たった箇所、化け物の右腕は勢いよく飛んだ。

「おお……」

「すごいよ！ 北つくん！」

『グオオオオ！！』

あまりのことに戦慄する俺。

それを見て疲れも忘れ喜ぶ姫。

苦悶の叫びをあげる化け物。

これならいける。

もう一度刀で空を斬る。

しかし今度はさっきとは比較にならない小ささの衝撃波が出る。

ひよろひよろと危なげに飛んだ衝撃波は化け物にかすり傷を負わせた。

……つてええっ?!

なんで?

どういうこと?

刀を呆然と見つめる。

幸い化け物はまだ苦しんでいる。

考えているヒマじゃねえな。

俺はすうっと距離を詰める。

『グオオオオ!!』

なんとか立ち直り俺に拳を放ってくる。

しかし俺は慌てずかわし袈裟掛けに斬る。

『グオオオオ！！』

さらに苦悶の叫びをあげる化け物。

決まったな。

しかし俺の予想に反し化け物は力を振り絞り俺を跨ぐように跳んだ。

向かった先は……やっぱ、姫だ。

「え？ ええっ？！」

いきなりのことに疲労も手伝って動かずにいる姫。

俺は無我夢中でさっきのひよろも忘れて刀で空を斬った。

今度は最初とも比べものにならない大きさの衝撃波が出る。

姫に襲いかかった化け物は真つ二つになり果てた。

「おい、じいさんよ。 化け物死んじまっ たぜ？ どうすんだ？」

「ふむ……。
降参の……ようだな」

がつくり崩れ落ちる。

……そんなに悔しいことなのか？

「なあ、じいさん。 あんたこの刀を使って何しようとしたんだ？」

「少年、名前は？」

「生島北斗だ」

「ならば生島君。」

君は自分の娘をなくしたことはあるか？」

……俺にその質問はおかしいだろ。

「いや、まだ高校生だし」

「そ、そうだな。」

私はなくした娘を連れ戻すためにその刀が欲しいのだよ」

「どういうことだ？」

「今から言うことを全て信じてくれるか？」

何をいきなり。

「実は

「生島ア」

お？

志摩さん達来たみたいだな。

みんな無事か……

よかった。

つか

「水橋、何を持ってんだ？」

「人質」

さいですか。

まさかここまでするとは。

「それより生島。
どうなっているんだ？」

「ん？ ああ、ちょっと今話聞いてたんだ。
みんなも聞くだろ？」

「さて続きを話そうか」

俺達は今個々に座布団に座っている。

まあ、水橋は座っている上に捕虜と称す女を座らせているが…

そして何を思ったか姫も俺の上に座っている。

……うつとうしい。

「そのままでもいいのかね？」

「「はい！」」

即答したのは姫と水橋ね。

「では……今から話すことを信じてくれるか？」

「「はい」「

みんなで即答する。

「私の娘は……今、異世界にいる」

ふんふん。

「そして、魔王に捕まっている」

ふんふん。

「だから、その娘を取り戻す為にその神器が必要だったのだ」

ふんふん。

「以上だ」

ふんふん。なるほど。って

「信じられるかあ!!」「」

お、みんなの心が1つに。

まあいきなりすぎるわな。

「ならば何故何十億もかけて暗殺者も雇ってこんなことをしなければならぬ？」

……たしかに。

「ついてきてくれ」

老人、あらため有馬さんは階段を更に登っていく。

つかマジ高いよなこのビル。

ずつつと登ってきたのに。

まだ登るんだから。

ついていった先にはなにやら大掛かりな機械が……

「これが異世界への扉だ」

へえ。

「これを起動することで異世界へ行ける」

はあ。

つまり俺達に行けと？

「いいぜ。

乗りかかった船だ」

志摩さん。

勝手に決めないで。

「うるせえ。

いかねえと今の100倍いじめるぞ」

口に出てたか。

「それは嫌です。
行きます」

「北つくんが行くなら私も行く！」

「俺は嫌だぜ。

そんなわけわかんねえとこ行くの」

嫌がる水橋に志摩さんは耳打ちする。

「行く！ 行きます！」

志摩さん何言った？

「はあ、仕方ないですネ」

良平はしぶしぶといった感じだ。

「みなさん、ありがとうございます」

深々と頭を下げる有馬さん。

今思ったけどこの人大企業の社長なんだよね……

ん？

つつつか……

「有馬さん、異世界に行けるならこんな回りくどいことしなくてもよかったんじゃない……」

「いや、異世界にはモンスターがいる。
私はそのモンスター一体を捕獲するのに百人を犠牲にした。
その一体をクローン技術で増やしたのがあのモンスターだ。」

我々はガーゴイルと呼んでいた。

ちなみに原型は生島君が倒したあれだ。
クローン技術の過程でどんどん退化していったのでな」

マジか……

あんなんが何体もか。

「じゃあねえな」

「では……？」

「ああ、娘さん取り戻してくるよ。
志摩さんじゃねえが乗りかかった船だ」

「ありがとう」

「では、生島。
頑張ってこい！」

……は？

「志摩さんいかねえの？」

「ああ」

言い出しっぺが何言ってやがる。

「勘違いするな。」

私は後の処理、お前らの学校を休む理由や親御さんへの言い訳をしなくてはならないからな」

……なるほど。

「では、みなさん。後はこのスイッチを押すだけです。
私の方でも今後の会議がありますので」

そう言つて有馬さんは奥へ消えた。

よっぽど俺ら信頼されてんな。

「じゃ、みんな行くよー！」

姫が元気よく言う。

「あなた、その娘連れて行くんですか？」

「うん」

水橋が抱きついている娘。

稲葉だったか？

もう何の抵抗もせず俯いている。

「じゃ、行つてこい！！」

お気楽でいいな、志摩さん。

「じゃあ、スイッチオン」

俺達は光に包まれた。

11話・守るために出来ること　くいと異世界へく（後書き）

ついに異世界へ突入です。

12話：出掛ける時は計画的に

光が消えた時、俺達は全く別の所にいた。

辺りは緑につつまれている。
いわゆる草原ってやつだな。

そして俺の他にも姫、良平、水橋……まだ抱きついてやがる。
あと志摩さん。

……ん？

「なんで志摩さんいんの？」

「ん？」

「なんでいるんだろっな」

「ええええええ！？」

「ちょ、学校はどっすんの？」

「まあ、なるようになるだろ」

そんなお気楽な。

ん？

ちょっと大事なことを思い出した。

「っていつか、どうやって帰るんだ？」

「「あ
「

「「.....」

「「どうしよ」

いきなり絶対絶命ってやつか？

「だ、大丈夫だよ」

姫が言い出す。

「なんで？」

「だって、あの社長さんの娘さんを探せばいいんだよ」

「なるほど」

そうか……

そうだな。

その娘に帰り方聞けばいいんだから。

「偉いぞ、姫」

「えへへ」

「ところでその娘はどこにいるんですか？　と言っかここはどこですか？」

新たに良平からあがる疑問。

……俺達って何の情報もなしに来たんだよな。

「とりあえず歩こうぜ。ここにいても埒があかない」

まあ、水橋の言うとおりだな。

俺達はとりあえず歩くことにした。

……マジいつまで抱きついてんだ？
水橋。

とりあえず俺達は歩いた。

しかしいつまで続くんだ？ この草原。

『ガア！』

そして何匹でてるんだ？ このウサギもどきは。

さっきから茂みから続々と湧いてでてくるんだが……

幸い個々の強さはそれほどでもないんだが……

「いつまで続くんだ？」

口に出して言ってみる。

「ねえ、北つくん。あれ町じゃない？」

なに！？

「どこ！？」

「ほら、あそこ」

姫が指さした方にはたしかに町の輪郭が。

「おお！ みんな町だ。行くぞ！！」

みんな疲れも忘れ走り出した。

「ねえ、しずくちゃん。ほんとによかったの？」

生島達は走り出したが俺としずくちゃんはまだ立ち止まっている。

まあもっとしずくちゃんは俺が抱きついていていいるからなんだが……

俺はそこで大きな疑問を聞いた。

「何がだ？」

「いや、無理やり連れて来たみたいだから……」

しずくちゃんはフツと笑う。

「何をいまさら。」

「ここまで来たらもう力を合わせて元の世界へ戻るしかないだろう?。」

「そ、そうだけどさ」

「もういいさ。」

私としてはそんなことより離れてほしいのだが」

「で、でも……」

「大丈夫。」

逃げたりしない。

しばらくはついていくよ」

俺はほんとうにしぶしぶと離れた。

「おい、水橋イ!! 早く来いよ!!」

生島が呼ぶ。

「さて、行くぞ。
水橋望」

スツと手を出してくるしずくちゃん。

「うん！ でもしずくちゃん。俺のことは望って呼んで」

「……………分かった」

そんなにしぶんなくても……

「おお、町だ」

思わず感嘆の声をあげる俺。
別に田舎者ってわけじゃねえぞ？

ただ……

「レンガの家なんて実物で初めて見たよ」

そう、それなんだ。

姫も驚いている。

とりあえず情報集めだな。

「しかしどこにいけばいいんだ？」

町にはファンタジーらしく宿屋や道具屋、酒場などがある。

まあ順当にいけば酒場が一番情報が集めやすいな。

俺達は酒場に入った。

「お嬢さん、どうか私と一緒に愛の旅路を行きましょう」

またやってるよ……

水橋、見境ないな。

でも今はそんなことより大事なことがあるから止めよう。

「ぐはあ!!」

え？

俺何してないよ？

したのは稲葉。

しかも……金蹴り。

「し、しずくちゃん。そこはマジダメだって」

痛そうに押さえる水橋。

「今は他にやることがあるだろう？」

まああいつは稲葉に任しておけばいいだろう。

俺は手近にいた旅人っぽい人に話しかけた。

「すみません」

「なんだい？」

ものすごく気さくな人に話しかけたみたいだ。

「え〜と……」

なんて聞こう？

まさか魔王どこなんて聞けるわけないし……

「魔王かい？」

魔王ならここから大分離れた魔城にいるよ」

あら〜、口に出てた。

「そうですか。」

ありがとうございます」

「いえいえ」

しかし意外だなあ。まさかこんな簡単に情報が入るなんて。

「お〜い、みんな行くぞ」

俺達は酒場を後にした。

影から覗き見られていることも知らずに……

「情報入ったのか？」

「ああ、ここから大分遠くだ。

北の山脈超えて、森抜けて、雪原を行った先にあるらしい」

「うわゝ、大分遠くなんだね！

私てつきりコンビ二行く程度だと思ってたよ！」

なんで魔王倒すのにそんなお手軽だと思っただ？ 姫。

「ちょっと待って下さい！」

突然俺達にかかる声。

さっき俺が話しかけた旅人だ。

「言い忘れてたことがありました。
『クロウン』に気をつけて下さい」

「クロウン？」

「ええ、魔物の身でありながら人に姿を変え、油断を誘う危険な魔物です」

「へえ、気をつけます。

でも、なんか見分け方とかあるんですか？」

「ええ、クロウンは一度変身すると前に変身した姿の一部が見えるんです。

そして次が一番大事なんですが」

一息つく。

「初めて会った人をあまり信用しないことです。
さもないと、こんな風になります！」

突如変異しだす旅人。

そして変異後の姿はまさしく化け物だった。

筋骨隆々な体。

手には小型のナイフが握られている。

『グヘヘ。』

これからは気をつけるんだな。

もつともここで死ぬから関係ないか！』

拳を繰り出そうとするクロウン。

しかしどこからか飛んできた矢が頭に刺さり絶命した。

なんで？

「どっから飛んできた矢だ？」

辺りを見回すと弓矢を構えた女が。

「え〜と……どなた？」

「私か？ 私はイリエ。 そんなことより危なかったな」

助けてもらったにも関わらず警戒を解かない俺達。

まあだまされたところだから……

「無理もない。

私がクローンではないという証拠がないのだから……

なんなら脱ぐか？

そうすればわかるが」

「うん！！ はうっ」

一番最初に反応した水橋に金蹴りをくらわす稲葉。

「いえ、結構デス。失礼しました」

良平がとりなす。

「ふむ、ならよかった。

ところで君達は旅をしているのだろうか？ 私も連れていってくれない

か？」

「いいぞ」

即答！？

志摩さんまさかの即答！？

「こつちも来たばかりであまり詳しくないのでな」

……なるほど。

「こちらもありがたい。
ところで君達。

その服装は少々目立つのではないか？」

言われてみれば……俺達は普通の私服だし、稲葉は黒いスーツだ。

この世界では大分目立つだろう。

「ついてきてくれ。服なら店で買おう」

「わは、かわいい！」

服屋に入るなり姫が喜ぶ。

いろいろと俺達の世界ではコスプレとも呼ばれているような服が並んでいる。

「しずつち！ 行こ！」

稲葉は姫に手を引かれ奥へ入っていく。

姫……『しずつち』って。

「さて……あなたたちはどうします？」

ん？ どうしょ？

「とりあえず軽めの鎧でいいでショウ」

そうだな。

いろいろ悩んだ結果俺は黒、水橋は赤、良平は薄い緑の鎧を着ることになった。

全て軽い。

防御力より動きを重視した装備だ。

「見て見て！ 北つくん！ 似合う？」

えゝどれどれ……

ちよ、どんだけ大胆な服着てんだ。

胸の大きく開いた服。
防御力なんて無視だ。

「「却下！」」

叫んだのは俺と良平ね。

ちなみに水橋は姫と一緒にの服装で出てきた稲葉を見て再起不能になっている。

「ぶ」

引っ込む姫。

時々あいつのことがわからなくなる。

結局姫は薄いピンクのワンピース状の鎧もどき、稲葉は白を基調とした黄緑の軽鎧を着ることになった。

……姫のやつ完全にピンク色になったな。
で、志摩さんは……
あり？

変わってない。

「なんで？」

「私に身を守るものなど必要ない！」

……さいですか。

もつつっこまねえよ。

「みなさんよくお似合いです!」

誉めるイリエ。

「さて、会計は……」

うん、俺達この世界の金ないよ。

「え〜とお金ないんですか?」

「「は、はい」「」

「なら出しておきますね」

「「「申し訳ない」「」

最近ハモること多いな。

「いえいえ、たいした金額じゃありませんし」

「ありがとうございます」

「では行きましょう！」

会計を済ましイリエが元気よく言う。

さて………ちょっといいか？

俺達………

計画なすれー！

12話：出掛ける時は計画的に（後書き）

今更ですがあまりキャラ描写は詳しくやりません。（志摩さんは別）
できるだけみなさんのイメージで構成したいと思いますので。

13話：みんなが乗り気な時はとりあえず合わせよう（前書き）

ちょっと短めです。

13話：みんなが乗り気な時はとりあえず合わせよう

「なあ、イリエ」

俺達は町を出て草原を歩いている。

どうやら俺達は目的地とは真逆を歩いていたらしい。

そうやって歩いていると、志摩さんがイリエに話しかける。

「なんでしょう？」

「とりあえずざっと世界の状況、地理を教えてください」

「わかりました。

でもなんでそんなこと聞くんです？

あなた達はどこから来たんですか？」

なかなか鋭いな。

「それはだな……」

俺達は今までのことをざっと絶命した。

「……にわかに信じがたいですね」

そりゃそうだろうな。俺だって自分で話してて信じられねえもん。

「だが事実だ。

証拠は私達が今ここにいることだ」

「はあ……」

「それよりさっきのことだが……」

「あ、ええ。

この世界は中央の大きな山脈、『ヒナゲシ山脈』で4つに別れています。

まず私達がいる南の『サニウス』。

東の『イーリスト』。西の『ウエチスト』。そして魔城がある北の『ノーリウス』があります」

ふむ……安直だな。英語＋一文字か。

「南は野菜。

東は穀物。西は調味料。北は魔法品の生産が盛んで、それぞれ交易がなされています」

うん、北以外は一般的だな。
魔法品って……。

「やっぱり魔法なのね」

「何がですか？」

「いや、なんでもない。続けてくれ」

「はあ……。

目的地の北にはやはり山脈を通り行くしかありません。

また北には魔城以外にも魔法都市があります。

もちろん魔城は一般的に立ち入れません」

まあ俺らが気楽に入れるなら有馬さんが来てもいいだろうからな。

「ところで、みなさんの武器見せてくれませんか？」

「いいぜ」

しばらくしげしげと俺達の武器を見て目を見開くイリエ。

「やはりでしたか」

「すいません、事態が飲み込めません。」

「どうした？」

「いえ……」

「異世界から来たのに武器を持っているのは不自然でしたから……。話を聞くにそちらは武器なんて持ってないのが一般のようでしたから」

「「はあ」「」」

「まだ事態が飲み込めません。」

「まさかあなたが神器を持っているなんて」

「神器？」

「ええ。」

「184年前の大戦を終戦に導いた5種の神器です」

半端だなあ。

184年って……

つか……

「5種類なのか？」

「3種類じゃねえのか？」

「いえ、使われたのは刀、槍、銃、なた、杖の5種類ですよ」

「へえ」

「現在のところ、杖は魔法都市に保管されていて、なたは『ウエチスト』のどこかにあると言われていました」

「それでこの3種類は行方不明だったってわけか」

「ええ、そうです。まさかこんなところに……
いいですか？」

神器は貴重以前に退魔の力が備わっています。
持っているだけで上級の魔物は寄り付きません。
とても便利なものなので様々な所で狙われる可能性があります。
けっして離さないでくださいね」

なるほど……

ようやく有馬さんがこの武器に固執した理由が分かった。
とりあえずこれがあるだけで身は安全なのか……

「あ、大丈夫だぞ。これ、体に張り付いてとれないし」

「そうなんですか？」

「ああ」

「なるほど……」

また新しい発見ですね」

ん？

「今までに前例はないのか？」

あつたらそれくらい分かんと思うが」

「神器は大戦以降なんの機能もしないままだったんです」

へえ。

「最後に世界の状況ですが今のところ平和そのものです」

「なるほどね」

「ちなみに具体的なルートとしては『ヒナゲシ山脈』を通り麓の『ストレイ森林』を抜け、『シベルリア雪原』を行くというルートです」

へえ。

クロウンって嘘はついてなかったんだな。

……まあ異世界から来たなんて思わないだろうからな。

「で、ここがヒナゲシ山脈の入り口です。
どうします？」

歩きます？ ロープウェイ乗ります？」

なんでそんな質問が出るんだ？

そんなの乗るに……

「歩く!!」

決まってる方がお一人いらっしやったようで。

志摩さん、観光しにきたんじゃないんだから……

「あゝ、志摩さん？俺達はそんなことしてるヒマないの分かってる？」

「いいじゃないか。せっかく来たんだから」

観光気分だったの!？

「「なるほど」」

お、おい。

みんな何に納得したんだ？

まさか歩くとか言いださねえだろうな？

「たしかに登った先に何かありそうですネ」

良平！

なんだ？ いつからお前はアスリートになった！？

「ダイエットなりそ」

姫！ 大丈夫だって。お前は十分細い！

「これも訓練か……」

稲葉！ 何悟ってんだ！？

「しずくちゃんが行くなら俺も」

………

「決まりだな。
歩く！」

すいません、俺の意見は？

「冗談じゃねえ。

俺は乗るぞ」

自己主張してみる。

「「そうか」「

……え？

みんな納得？

「じゃあ頂上で待っていてくれよ」

ちよ、マジみんな行くの？

「じゃあ私はみなさんを案内しますね」

あ、ああ……

行っちゃった。

.....

ヒュウ〜

風が吹いた気がした。

.....

「待つて〜!!
1人はイヤー!!!!!!」

俺はあわてて後を追った。

14話：食べ過ぎ飲み過ぎには注意

「なあイリエ」

山を登り始めた俺はイリエに疑問を言う。

「この神器の能力とかって分からないのか？ 退魔だけじゃなくて」

なんか衝撃波だせるしな。

「詳しいことは魔法都市にある文献に載っていますので、私からはなんとも……」

つまりそこに行けばいいわけだな。

……まあ通り道か。

「とりあえず早く登りきろうぜ。
あとどれくらいなんだ？」

「えー……今やっと10分の1ってところですね」

……は？

登り始めて30分はたったぞ。

どんだけ高いんだよ。

「あ、途中にはオークの巣がありますので気をつけてくださいね」

なんで登山道にそんな巣があるんだ？

「だから今はロープウェイを使う人がほとんどいませんよ」

口に出たか。

まあぱっぱと行けばいいんだな、うん。

ちょうど登り始めて3時間、山の中腹にさしかかったころ、辺りが殺気で充満した。

「来ましたよ。

オークの巣です」

「やっぱあるんだな……しかもめっちゃ多い」

見渡せるだけでも100をこえる数。

「じゃあねえな」

それぞれに武器を構える。

「姫！ 絶対離れるなよ！」

近くにいたオークが一匹襲ってくる。

俺はそのオークに攻撃させる暇なく喉を突き刺した。

血を流し倒れるオーク。

それを見た他のオークはいつせいに襲いかかってきた。

たしかにオークの数は多いが個体が弱いのと、こちらのメンツに広範囲の攻撃を行えるやつが多いのとでたいした苦戦はしなかった。

稲葉の攻撃方法ってワイヤーなんだな。

……怖ええ。

しかし……

「いつまで出てくるんだ？」

そう、たしかに苦戦はしないのだが倒しても倒してもわいてくるオークにうんざりしてくる。

「これだけ大規模な群れですからどこかにボスがいるはずです」

なるほど……

「いつ出てくるんだよ？」

その時志摩さんがオークの群れの奥からズルズルと何かを引きずって出てくる。

「おい！！ オークども！」

志摩さんが叫ぶ。

「人語が分かるかどうか知らないがよく聞け！ お前らのボスは私の前にひれ伏した！ こちらの指示に従え！」

へえ……。

志摩さんボス倒したんだ。

……つてええ？！

「志摩さんボスの話知らなかったんじゃ……」

「んなもん、一番奥で偉そうにしてるやつがボスだって相場が決ま
ってんだよ」

そついや志摩さんの趣味の一つに不良グループ壊してあったよな

……

で、オーク達は結局従順になったわけだが……

「志摩さん早く登ろうぜ」

新たなボスに祭り上げられた志摩さんは上機嫌で運ばれた果物をむ
さぼっている。

「シャクシャク」

シャクシャクじゃねえよ。

「ったく、みんな行こうぜ」

「「シャクシャク」」

.....

なんでみんな一緒に食ってたよ。

「おいしいよ！
北つくん」

おいしいじゃねえ！

「ほんとにおいしいですヨ」

..... つつこみどころがねえ。

「うむ、うまい」

稲葉、お前どこの美食家だよ。

「しずくちゃんと一緒ならなんでもつまいぜ」

……………こいつもしつこいな。

………つか俺の扱いが最近ひどい気がするんだが。

そっいえばイリエは……………？

……………

あ、いた。

オークと情報交換中……………

もうどうでもいいや。

俺も一緒に食べよう。

「「シャクシャクシャクシャク……………」」

結局巢をでたのは夕方にさしかかったころだった。

「うう、食べ過ぎた……」

姫のやつめつちや食ってたからな。

「大丈夫か？」

「大丈夫じゃない」

「まったく……」

あんなに食うからだ」

「うう、北つくんおんぶ」

「ガキか?!」

「じゃあ肩車ア〜」

「なんでそうなる？」

「んじゃ、だつこ〜」

「……」

「……おんぶでいいです」

「……わかったよ」

「わあい！」

はあ。

それからのはなんの騒動も起きず順調に山を登った。

まあ水橋のやつが何に触発されたか稲葉におんぶをせまって金蹴り食らっていたが。

こりないやつだ。

「姫？」

大丈夫か？」

「……スピ」

……

「貴様……人におぶわれて寝るとは、いい度胸だな」

……まあいいか。

なんだかんだでこいつも疲れたんだろ。
ちよつと甘い気もするが……

だあゝ、やっと着いた。

登り始めて8時間。

ようやく着いた頂上は……

「すげえな」

そう、志摩さんが言うように絶景だった。

沈む夕陽。

地平線が霞んで見え、様々な色が景色を織りなしている。

「姫。起きろよ。
すげえぞ」

いまだ寝ている姫を起こす。

「んにゃ……？」

おお！　すごい！」

「だろ？」

「苦労して登ったかいがあったってmondaneえ」

……

「お前はほとんど登ってないだろうがぁ！」

「や、やだなあ。」

冗談だよ」

「ったく……。

ほら、降りろ」

俺は手を離す。

「いや！」

ちよ、

「離せ。」

首しまる、首しまるって！」

俺は仕方なく手を戻す。

「もうちょっと景色を楽しもうよ」

「降りたっていいだろ？　それは」

「ここからがいいの！」

「なんでだよ」

「別にいいじゃん。重くないし」

「自分でいうな！」

「まさか北つくんは私が重いつていうの？ 姫ちゃんショック！」

「やかましい！」

いつまでこんな漫才させられるんだ？

まあ反射的につつこむ俺も悪いが……

俺はあらためて景色を楽しむ。

本当に絶景だ。

温度も酸素濃度も頂上とは思えないくらい気持ちいい。

登ってきた方を見れば草原が広がっている。

降る方を見れば大きな町が転々とある。

そんなこんなで夕陽が完全に地平線に沈んだ。

「ふう、よかったよかった」

「さて、寝マス？」

ちょっと 寝るには少し早い気がしたがいかんせん疲れていたため、何も考えずすぐに寝た。

まだ薄暗いところに俺は目を覚ました。

この時間帯ってなんて言うんだろうな？

東雲？ 暁？

まあとりあえずだ。

俺がこんな時間に目を覚ましたのは見たいものが……

「やっぱり夕陽があんだけ綺麗だったんだから朝陽もすごいはずだよな」

俺は昨日見た位置に立つ。

恐らくもつ少しで陽が昇るはずだ。

.....

まあ、そんなに人生甘くはないわな。

しばらく待つか。

「生島さん」

ん？ 誰だ？

「おお、稲葉」

「どうしたんだ？」

「いや、こっから見る朝陽はすごい綺麗だろうなあ、って思って」

「私と一緒にだな。隣、いいか？」

「ああ、いいよ」

稲葉が隣に座る。

「……」

「……」

「気まず……」

「そういえばこうやって話すの始めてだ。」

「……何話そ？」

「俺この空気弱い。」

「生島さん」

「お、向こうから会話が。」

「な、なんだ？」

「姫とは親しい仲なのか？」

「姫とは仲良くなっただけだな。」

「……あの服屋でか。」

しかし……

「その質問はどういう意味なんだ？」

「そのままだ。

お前達2人はあまりにも仲がいいのでな」

まあ傍目にはそう映るのか。

「ん、まあ幼なじみってやつだ」

「そうか……」

「でもなんでだ？」

「いや……なんでもない」

………ピーン!!

「水橋か」

「……」

図星か。

わかりやすいやつだな。

「まあ心配しなくてもぞつこんだから」

「……」

おーおー。

わかりやすいねえ。

ん？

「稲葉！！」

見ろよ。出てきたぜ！」

地平線から徐々に光が漏れてくる。

まわりが明るくなってきて、全貌が明らかになる。

うん！ やっぱ絶景だ。

俺達はしばらく我も忘れて景色を楽しんだ。

「すげえな」

「ああ、すごい」

なんだよ、稲葉って暗殺者なんかじゃなくて、ただの女の子じゃないか。

恋したり、綺麗なものが好きだったり。

「さて、みんな起こすか！」

「ああ」

さて、これからは下山だな。

15話：黒との邂逅

オーク達にもらった果物を朝食に、俺達は下山を始めた。

ここで一つの疑問が……

「姫、何故俺の背中に乗っている？」

そう、昨日と同じように姫が負ぶさっているのだ。

「気分！ いいでしょ、女の子とこんなに密着できるなんて貴重だよ？」

こいつ、俺が昨日から意識しないようにしてたことを……

やばい背中のがんが……

「やかましい！」

お前なんか昔から知ってるから嬉しくないんだよ」

強がりを書いてみる。

つかおぶっているから必然的に耳元で声が聞こえるんだよ。

「そんなことないもん!!」

「鼓膜破れるだろがぁ!!」

「ふん!!」

まったく……

憂さ晴らしに姫を落とそうとする。

「やゝ!!」

……俺って学習能力ないよな。

「首しまるって!!」

「北つくくんが手を離すからでしょ!!」

お前がおぶさるからでしょ!!

「ほんとに仲いいのな、お前ら」

じたばたしてる俺達に水橋から声がかかる。

「仲がいいように見えるのか？」

「ああ、とてもな」

そつえばこいつ最近俺達にからんでこないな。

……あ、稲葉がいるからか。

「お前は稲葉のところに行かなくていいのか？」

「私ならここにいるが？」

うわっ？！

いつの間に俺達の隣に。

「先ほどからずっといるんだが」

口に出た。

まったく気付かなかった。

「気配を消していたからな」

また口に出た。

つかさずが暗殺者。

「しずくちゃん。こっちきて一緒に歩こうよ」

そういえばこいつって女口説く時の特有のさむい言葉を稲葉にはいわねえな。

……心底惚れているからか？

まあとりあえず……

「あゝ、そういうのはどっか向こうでやってくれ。
俺このバカだけで精いっぱいなんだから」

「ちょっと北斗！！バカって私のこと！？」

「急にキャラを変えるな！」

「えへへ」

えへへ、じゃねえぞ。

.....

「2人ともなんでそんな真剣な顔で俺達を見てるんだ？」

「な、なんでも。（俺もしずくちゃんとあんなことしたい）」

「私もなんでもない。（うらやましい……）」

バレバレだなこの2人。

「ほら、散った散った」

離れていく2人。

しかし、あの2人が素直になる日も遠くないな。

「しずくちゃん！
俺達も……ぐはっ」

訂正。

やっぱり稲葉が素直にならないとダメだな。

しかし……

「しずくちゃん。
真面目にそこはやめて。男としての機能なくなりそうだから」

そう、それだ。
見てるだけでも背筋が凍るぜ。

ところで良平は……
イリエと道端の植物についてなんか語っている。
こっちもいい雰囲気だ。

……あれ？

「志摩さんは？」

「呼んだか？」

どわっ！

「し、志摩さん。

なんで土の中から出てくるんだよ？」

「こっちの方が安全だからな」

もうつっこむのめんどくせえよ。

つうか志摩さん、人間か？

そんなこんなで順調に下山が進んだ。

「ここが『ストレイ森林』か」

目の前には鬱蒼とした森林が……

まだ朝だというのに木の影で中は薄暗い。

なんつうか……

「激しく入りたくないなあ」

「何言ってるんですか？　ここは避けては通れませんよ」

使い方違う気が……

「わかってるよ」

俺はいやいやながら森林の中に歩を進めた。

「うわゝ、迷いそうなことで」

森の中は相当入り組んでいる。

「ここは迷いやすいですから、離れないでくださいね」

「はい」

遠足気分か！？

森に入って30分ほど経ったころ。

「なあ、まだ出ないのか？」

「まだですよ。」

だってここ専門の人がいないと道が分からないくらい入り組んでいるんですから」

「マジで？」

んじゃ、イリエってここ来たここあるの？」

「ええ、南と北は小さい頃から何回も往復していますから」

はあ、すげえな。

つか

「イリエさんと会ったのは幸運としかいいようがないですネ」

うん、まっただ。

「ならば、その幸運もここで尽きたな」

突然かかる謎の声。

聞いた瞬間に思わず背筋がゾワッとなった。

「なんだ？」

出どころの分からない声に俺達は警戒し、臨戦態勢に入る。

「なんだか知らないが出てこいよ！」

「出てこいと言われて出てくるバカはいないだろう？」

正論だな。

「だが今は出てきてやろう」

んじゃ、あんたバカってことじゃ……

出てきたのは全身を黒甲冑に包んだ……男？

「へえ、重くないの？ そんな鎧着て」

相手の素性が分からないので挑発を試みる。

「どうかな？」

少なくともお前達よりは速く動けると思うぞ」

そう言った瞬間黒甲冑の姿が消える。

「なっ！？」

驚いたのもつかの間、隣にいた良平と水橋が吹っ飛び木にぶつかる。

「良平！ 水橋！」

そして次は稲葉が飛ばされる。

「稲葉！」

「他人の心配をしてる場合じゃないと思うぞ」

耳元で囁かれる声。

「…………！？」

とっさにガードし、吹き飛ばされるのを防ぐ。

「ほう。」

少しはやるようだ

鍔迫り合いをしながら男が言う。

「な……んだよ。」

お前……何者だ？」

やべえ。

力強い。

「知る必要はない。ここで死ぬのだからな」

「お決まりのこと……言いやがって！」

弾き返し斬る。

しかし刀は空を斬った。

男は既に数歩の差をあけて立っていた。
確認した次の瞬間、視界が黒に染まる。

次は不意打ちなんざ喰らわないぜ！！

俺は黒甲冑が繰り出した刀を避け、そのまま斬った。

金属の触れ合う音がして刀が弾かれる。

ちっ、予想より硬いようだな。

「いくら神器とはいえ、この鎧は簡単には斬れん」

神器のこともお見通しか……

こりゃ敵の重役が出てきたな。

「うおら!!」

立っていた黒甲冑がいきなり吹っ飛ぶ。

ナイス！ 志摩さん。

「くっ、ギャラリーはいらん」

再び黒甲冑の姿が消える。

志摩さんは心配ないが、

再び森林に金属の触れ合う音が響く。

「こいつだけはやらせねえよ」

姫を背に刀を防ぐ俺。

「ほう……」

「志摩さん。」

ちよっと引っ込んでてくれないか？」

ちよっと俺の禁忌に触れたからな。

「フッ、いいだろう」

「姫に手を出す奴は許さねえ！」

俺は刀で空を斬る。

紫の衝撃波が黒甲冑を襲う。

しかし黒甲冑はそれをかろうじて回避した。

「今のは……!？」

黒甲冑の肩の部分が斬れた。

「この『血煙の鎧』をも斬るか。
だが、次の段階はまだのようだな」

へえ。

次がまだあるんだ。

「そんな余裕でいいのか？」

「ふん、あんなもの2度と当たるか」

……たしかに。

だが

俺はもう一度空を斬る。

紫の衝撃波が黒甲冑を襲う。

黒甲冑は苦もなく避けた。

しかしそれも予想済みだ。

わざと誘い込むように放ったので、避けた先に先回りし、斬る。

三度響く金属音。

やっぱり直接は斬れないか。

すぐさま態勢を立て直し、次の攻撃に備える。

だが黒甲冑は飛び退き距離をとった。

「なかなかやるようだ。

ならば……開け」

黒甲冑の謎の言葉と共に、黒いオーラが湧く。

「貴様はたしかに少しはやるようだ。
だが……魔法というものを知るべきだったな」

俺は黒甲冑の刃を受けたはずだった。

しかし、吹き飛ばされる。

木にぶち当たり、昏倒しそうになる。

朦朧とした意識の中、黒甲冑の声が響く。

「神器を継ぎし者よ。意識あるなら聞くがいい。我が名はシナトラ。
『血しぶきの剣』と『血煙の鎧』を継ぐ者だ。
神器とは何か。知りたくば魔城に来るがいい！」

それだけ聞いて俺の意識は闇に堕ちた。

16話：戦いの後

ふむ……

お？

今回は私視点か？

何？ 最初ちょっとだけだと？

……まあいい。

今は森の中だ。

で、目の前には生島、水橋、良平、稲葉が気絶していて、新島とイリエがせつせと介抱している。

急な展開に私も少々動揺している。

急に訪れた世界。

そして急に現れた敵……

おそらくは私でもてこずるだろう強さだった。

しかしこの世界、いや、少々前から気になっていることがあるのだが……

「イリエ」

「なんででしょう？」

「少し聞きたいことがある。
ちよっと来てくれ。新島！ そいつら頼んだぞ」

私達は少し離れたところに来た。

「なんですか？」

突然のことに訝しむイリエ。

「単刀直入に聞こう。貴様……何者だ？」

私が気になっていた疑問、イリエという女は何者かということ。

「何をいきなり」

バン、とイリエの顔の近くの木を叩く。

「ふざけるなよ。」

貴様のことはずっと気になっていたんだ。

都合よく現れ、都合よく仲間に入り、都合よく森の構造も知っている。

偶然にしては出来すぎている。

何が目的なんだ？」

するとイリエはニヤリと笑う。

「さすがですね。」

この一行の中で、一番勘の鋭そうなあなたの前ではボロを出さないようにしていたのに」

「前置きはいいい」

「はいはい。」

まず言いますと、私は敵ではありません。

というより別の目的があって動いているんです」

「ほう」

「そしてあなた達といった方が動きやすいんですよ」

「なるほどな……」

私達に言ったことも全て嘘か？」

「いいえ、魔城へは私の言った通りに行けば間違いなく着きます。私のついた嘘はひとつ……神器についてのみです」

「それを言え！」

「分かりましたよ。神器について私は文献を見なければ分からないと言いましたが、嘘です。

神器とはその人の心、すなわち神器に触れた最初の瞬間にその人が触れた一番強い意識が具現するんです」

つまり生島は新島を守りたい気持ち。

水橋は闘争心。

良平は前向きな心。

……か。

「そしてそれがいつそう強くなった時、神器に文字が刻まれ、新たな力が覚醒するんです」

なるほど……

「しかし、何故そんなことを教えるんだ？」

「ギブ&テイクですよ。私はあなた達に付いて行けば動きやすい。あなた達は情報が手に入る。お互いが得するでしょ？」

なるほど。

こい つはとんだ曲者だな。

しかし……

個々の力を上げるにはどうすればいい？

生島は新島を守らせる。

水橋は強い相手をぶつける。

良平は前向きに考えさせる。

3つを一度におこなうには……

ふむ。

難しい問題だな。

「志摩先生、イリエさん、北つくん達が目を覚ましたよお！」

負けた……

俺が最初に思い浮かんだ言葉はこれだった。

目を覚ますと姫達が介抱している。

だが俺は何も行動する気が起きない。

ただの負けじゃなかった。

圧倒的な……力の差。

最後の一撃は別だった。

受け止めたはずだ、という疑問より先にくる自責の念。

守れなかった。

以前に志摩さんに負けたのとはまた別格だ。

下手すれば娘がこの場からいなくなっていたかもしれない。

どうすれば……いいんだろうな。

「簡単な話だ」

最後だけ口にてていたのか、志摩さんが応える。

「相手より強くなればいい。」

私達が何も心配しないほど強く……といたいところだが、貴様、前言ったことを覚えているか？」

「俺の……本分」

「そうだ。

それを考える。

貴様にその決意はあるかどうかは知らないがな」

俺の決意。

あの日誓った決意。

よし！！

「志摩さん、俺まだ覚悟がなかったよいだよ」

そして力も……

「ああ、不足を感じたならいつでも私のところに来い。
いじめぬいてやる」

……志摩さん、台無しだよ。

俺は他の奴らを見る。

良平、水橋は相当落ち込んでいるようだ。

まあいきなり倒されたのだからな。

「ぐずぐずしてるヒマはねえ！
行くぞ！！」

志摩さんが言う。

あの人も２人のことをそれなりに気を使っているんだろう。

行こうとして立ち上がる。

「北つくん！！」

.....

「またおんぶか？」

「うん！」

はあ。

まあしょうがない。

「ねえ、北つくん」

その真剣な声に思わず耳を傾ける。

「次は怪我しないだね？　ほんとに……ほんとに心配だったんだから！」

そう言って俺の背中に顔を近づめる。

……

「次は心配させないから」

ボソツと言う。

「え？　何？　北つくん」

「なんでもないよ」

「うそだ！

なんか言ったよ！

教えてよお！」

「ちょ、首絞めるな」

何もできなかった。

気付いた時にはやられてた。

これは……悔しいのか？

いや、うれしいんだ。

世の中は広く果てしない。

つまりまだまだ強いやつはいるんだ。

そう思うとチンピラ倒していきがっていた自分が情けなかった。

やっぱり、悔しいんだな。

しみじみ感じる。

だが……

「次は負けねえ」

軽く決意した瞬間だった。

……はっ！？

「しずくちゃん！怪我してない？」

しずくちゃんが心配で抱きついちゃう俺。

「はぐあ」

また金蹴りですか……

涙をぐっところえる。

「す、すまない」

おや？ 珍しく素直に謝るんだねえ。

「だ、大丈夫だよ」

なんでだろ？

しずくちゃん見てたらなんか悔しさがこみ上げてきた。

思わずもたれかかってしまう。

「ごめん、しずくちゃん。もう少しだけこのままで……」

珍しくしずくちゃんは何もしなかった。

「ぐずぐずしてるヒマはねえ！

行くぞ！！」

志摩姐さんの号令でみんな歩き出した。

世界は広い。

だが俺はまだまだ強くなる！

最近は少しは慣れてきたつもりデシタ。

戦うという行為。

もともと内気な私はあまり好きではありまんデシタ。

そして今日、それがいつそう強くなりました。

私はどうすればいいでショウ？

「ぐずぐずしてるヒマはねえ！
行くぞ！！」

志摩先生の号令に私は気乗りしないながらも歩きだしました……

おお！ でっけえ。

森を抜け、少しいったところに魔法都市はあった。

全体的にカラフルだ。

まだ中はあまり見てないが、大きな建物がいくつもある。

すげえ。

なんかワクワクしてきた。

「わあ！

北つくん！ あとで買い物行こうよお！」

姫も同じようだ。

でも……

「姫、俺ら金無いだろ？」

「あ」

すごいがっかりする姫。

うゝん、どうしたものか……

その時ふとあるポスターに目が留まった。

『年に一度の武道家大会！！
魔法ありの戦いを勝ち抜くのは誰か！？賞金1120G！！
参加者募集中！』

これだ！

俺達はこの大会に参加することにした。

若干志摩さんが

「使える」

つぶやいた言葉が引つかかったが金、力が欲しい俺達にはとてもうれしい行事なので、参加する。

だが……

「ほんとにいいのか？ 良平。参加しなくて」

「ハイ、気にせず頑張ってください」

……まあ、体調でも悪いんだろう。

ってことにしておく。

しかし……

「やばい。

ワクワクしてきた」

17話：大会ってなんかワクワクするよね？

「で、結局出場するのは俺、水橋、志摩さんの3人だな？」

場所はファンタジーらしく宿屋。

しかしイリエには感謝してるよ、ほんと。

今までの代金全て払ってくれてるんだから。

「あれ？

しずくちゃんはでないの？」

たしかにな。

それは気になる。

「私の戦い方はこういった舞台には向かないからな。
暗殺は暗くひっそりとするからな」

「「……」」

怖ええ。

「まあ、とりあえず、だ。

なんか大会には150人近く参加するらしいからな。
油断は出来ないぞ」

「頑張つてね！
北つくん」

姫が言う。

で、それを見てもものすごい目をして稲葉を見ている水橋。

「……がんばれ」

お？ 珍しく素直。

「うん！！
がんばる！！！」

……張り切りすぎだろ。

「大会は明後日らしいからな。
それまでは自由行動だ」

とりあえずその日俺達は寝た。

「わぁ！　すごーい！」

姫が市場を見て騒ぐ。

大会を明日に控え俺達は買い物……の下調べに来ている。

「ねえ、北つくん！これ買って！」

……

「金無いつてだから」

「もうすぐ入るんでしょう？」

「お前俺が勝つ 前提で話してるな」

「うん！」

「たたく……」

「あゝあゝ。」

「いちゃついちゃって。そういう奴に限ってすぐに負けて帰るんだよ」

「あゝ、めんどくさいのに絡まれたな。」

「絡んできたのは見るからに雑魚っぽい男。」

「まあ無視だな。」

「いつちよまえに無視するのか？」

「うっとうしいな。」

「姫、行くぞ」

姫の手をとりその場を離れる。

「お？ 逃げるのか？ 臆病者め」

スタスタスタスタ

「おゝい！ 待てよ！」

スタスタスタスタ

「おゝい」

ふう。

「北つくん、良かったの？ あの人無視して……」

「気にするな」

相手にするだけ無駄だ。

「……そだね！」

でさ。北つくんこれは……」

あらためて見回すと本当に大会前っていう感じがするな。

それなりに武道の心得がありそうなやつらがポロポロと。

……… しません。

嘘です。武道の心得があると分かりません。

武器を背負っているのを見たからです。

「北つくん聞いてる！？」

「あ、悪い悪い」

「もう！」

頬を膨らませる姫。

「悪かったって。

で、何？」

「これ、欲しい！」

絶対買って！」

指の先にはシンプルな意匠のネックレス。

「へえ、お前こんなもんつけんのか」

「うん！」

ニッコリと微笑む姫。

.....

はっ！

やばいちょっと見とれてた。

でも、まあ頑張って勝たないとな。

姫との約束を果たすためにも。

「ハア……」

大会は明日なようデス。

しかし相も変わらずやる気も起きません。

そんな時にノックの音がシマス。

「良平。少しいいか？」

声の主は志摩先生のようにデスネ。

「どうぞ」

扉を開けて入ってくる志摩先生。

「なんです力？」

「……」

沈黙する志摩先生。

「なんですか？」

もう一度聞きます。

「貴様、逃げてばかりでいいのか？」

「言葉の意味がわかりませんガ……」

「考える。それだけだ」

そういつて志摩先生は部屋を出ていきマシタ。

……

ドサツとベッドに身を投げマス。

わかっていマス。

志摩先生の言葉の意味……

私はたしかに逃げてイマス。

戦うことも、自分からも……

「どうすればいいんですか？」

口に出して言ってみマス。

……

もちろん答えはかえってきません。

私はそのまま深い眠りにつきました。

おお！

右向け右、人！
左向け左、人！
上向け上、空！
下向け下、地面！

……まあ最後の2つはいつでもいいんだが……

とりあえずすごい人だ。

「おおい！ 生島ア」

ちよつと離れたところで志摩さんが呼んでる。
みんないるようだ。

……あれ？

「志摩さん、姫は？」

たしか志摩さんと一緒だったはず……

「ん？ まあ……な。そんなことより準備はいいか？」

はぐらかされたようだがとりあえず興奮しているためあまり気にならなかった。

まあ、どっかにいるだろ。

「開会式を行うらしい。稲葉、良平、イリエの3人はもう観客席に行った方がいいだろう」

「はい」

志摩さんに促され観客席に行く3人。

「さて、いざ出陣じゃあー!!」

…………俺つつこみ拒否していいですか？

「えゝ、これより第112回武道家大会を開催致します」

重役っぽい人が始まりの挨拶をする。

続いて渋い人がルール説明をする。
隣に布で覆われた檻みたいなのが置いてある。

「ルールは簡単！

予選から1対1での戦闘を行い、相手にまいったを言わせるか、気絶させるかしたら勝ちだ。

決勝トーナメントは予選で勝ち抜いた16人が同様のルールで戦ってもらいます。

さらにそれを勝ち抜いた人には賞金1120G!!
そして副賞としてこちら!!」

バツと布を取り去ると中には檻に入れられた姫が。

会場におお、と歓声があがる。

……は？

「はあああああ！！？」

思わず大声をあげて注目を浴びるがそんなの関係ない。

どうして姫が？

姫は檻の中でスヤスヤと寝ている。

……副賞ってことは勝った奴が姫を手に入れるんだよね？

……絶対勝たねえと。

「では、これより予選を行います。
選手のみなさんは会場へ移動してください」

予選の組み合わせを見る限り志摩さんや水橋と当たることはないよ
うだ。

とりあえず勝たねえと。

何がなんでも……

「次！ 67番！ 68番！ リングに上がって下さい」

俺の番号だ。

相手なんか関係ない。

「おお？ てめえは昨日の……
そうか。商品はお前が昨日連れていた奴だな」

.....

俺は相手が何か言っているのを聞かずに近付き裏拳を放つ。
完全に油断していた男はまともにくらい、吹き飛ばされる。

「68番気絶！

67番の勝利！」

悪いけど話聞いている余裕ないんでな。

結局大した奴はいなく、とんとん拍子に決勝トーナメントに進んだ。

別のところの最終試合を見てみる。

水橋は多少苦戦していたが、いい槍さばきで相手をKOした。

志摩さんは開始の合図と共に相手が倒れた。

……どうやったんだ？

他は特に飛び抜けた奴はいなかったが最終ブロックの奴は別格だった。

相手も相当な武道家なようだが、完全に遊んでいる。

背中には大きな剣を背負い、腰には更に小太刀をさしている。

年はそれほど高くなさそうだ。

20代後半ってところか。

とりあえず要注意人物ナンバーワンだな。
おそらく志摩さんと同等だ。

だが残念ながら俺も負けるわけにはいかないからな。

「これより決勝を行います！」

決勝の組み合わせを見る。

一回戦から要注意人物とか……

まあおそらくこれに勝てば優勝はかたいだろう。

別に俺じゃなくても志摩さんか水橋でもいいからな。

だが勝ち抜けば準決勝で水橋と。

決勝で志摩さんと戦うことになるな。

よし、とりあえずあの相当な手練れ……アシナに勝たないと。

ちよこつと番外編 作者救済処置

北斗

「なんだよ？
これ」

作者救済処置です。

北斗

「だからなんなんだよ？」

簡潔に言つと、次の話の内容が思いつかないんだよね。

まあおおまかには決まってるけど、細かい部分がまだだから。

北斗

「んで？　ここで何をしたいんだ？」

えゝ、こほん。

『第1回　キャラ募集！！』

北斗

「……………」

どうした？

北斗

「いや、心配なことが2つあってな」

何？

北斗

「まずはそいつのって、やっていいのか？」

ギクッ。

……………一応、秘密基地の掲示板では何も書かれてなかったよ？

北斗

「じゃあ、実際書き込みして聞けばいいじゃねえか」

アイデア盗まれるもん。

北斗

「ドケチか!？」

まあ、いいじゃん。
で、2つ目は？

北斗

「募集して集まるのか？　　つか見てくれている人なんかいるのか？」

……それは、やってみなけりゃわからねえじゃん。

北斗

「まあ、これで身の程つてもんを知れるだろう」

嫌な言い方だな。

でも募集はします。
詳細は……

・ 集まったとして
そのキャラが出るのは25話前後

・ 魔法使いとして出します

・ 性別、軽い容姿の描写、性格、後はおまかせでちょっとした設定も

こんなもんか。

では、小説を書きたくても時間がないそのあなた!!

自分のキャラをひとつ暴れさしてみませんか!?

北斗

「上手い言い回しだな」

うるさいな……

ちなみに設定に指定がなければこちらで勝手にします。

ちよこつと番外編 作者救済処置（後書き）

というわけなんです、本当にこついうことが駄目なら駄目とはつきり言っちゃって下さい。

逆にいいならぜひ書いてみて下さい。

評価・感想にて受け付けます。

よろしくお願いします！

18話：帝王来たりて

「ではこれより決勝トーナメント1回戦。 生島北斗選手 対 ア
シナ選手 を行います」

マイクを持った司会っぽい人が進行する。

予選と同じく20m四方のリングを観客席が囲んでいる。

観客席は魔法で守られているらしい。

そして俺とアシナは対面する。

俺はチラリと観客席より上にあるVIP席を見る。

賞品の姫がまだ寝ている。

…… ったく、面倒かけやがつて。

「それでは始めて下さい！」

開始の合図に反応し構えるが、相手は意外にも話かけてきた。

「お前……生島と言ったな。
あの副賞の娘を取り返したいらしいな」

「なんで知っている？」

構えをとらずに言う。

スキを出すための罠だったら困るからな。

「なに、予選の最中に聞こえたのでな」

予選の最中って……戦いながら聞いてたのかよ。

「その様子では凶星のようだな。
今回の大会は見たことの無い奴が3人も決勝トーナメントに進んで
きて何かと思ったが……」

副賞も過去に例がなかったからな」

どうやら大会常連さんのようだな。

「まあ、おおかた当たってる」

「そうか、だが負ける気はないのでな。いくぞ！」

構えるアシナ。

その瞬間纏っていた空気の質が変わる。

これは……闘気？

否、殺気だ。

どうやらマジに来るんようだな。

俺とアシナはほぼ同時に地を蹴り、互いの距離を詰める。

2つの影が交錯する。

皮一枚つてとこだな。

俺の肩は切れ、血が吹き出る。

アシナも同じだ。

すぐに向き直る。

腕は互角……いや相手が一枚上だな。

俺の方が踏み込みが甘かったのか傷が広い。

次は

「待ち」を選択した。

アシナはこちらに向かってくる。

俺はアシナの繰り出してきた一撃目を刀でいなす。

しかしアシナは逆の手で小太刀を握り放ってきた。

かろうじて避けた先には既にアシナの足があった。

蹴られ、吹き飛ばされる。

くっ、小太刀が厄介だな。

そして

「待ち」の選択肢はないな……

俺はよろよろと立ち上がり、構える。

ぐっと足に力を込め距離を詰める。

そしてアシナの前まで行くと、飛び越し背後をとる。

アシナは振り向き様に剣を横に振るがしゃがんで避け足払いをかける。

アシナはそれにかかって転倒するが地に着くか着かないかのうちに受け身を取り俺と距離をとる。

俺は慌てず次の行動に移った。

次は正攻法をとった。

距離を詰め、連続で刀を振る。

一撃、二撃、三撃と全て受け止められる。

やばい。マジ強い。

4 撃目を放ち飛び退く。

刀4本分くらいの距離で睨み合う。

今気付いたが観客席は静まり返っている。

多分、声が出せないのだろう。

何せリングは今殺気がぶつかっているのだから。

俺はフラツとよろける仕草をフェイントに距離を一気に詰める。

刀を振り下ろすが、寸前で阻まれる。

だがここからが俺の狙いだ。

片手をパツと離し、よろけたアシナの腰にある小太刀をとる。

それに気付いたアシナは急いで距離をとる。

が、俺は抜き取った小太刀を投げつけた。

飛び退く最中だったアシナは身動きがとれず腕で庇うことになった。

これで左腕はつぶしたな。

「ちっ、思った以上にやるようだな」

戦いの間は一切口を開かなかったアシナが口を開く。

「しょうがない。

いつもなら決勝までは使わないんだが」

アシナの右腕が淡く光る。

「ヒール」

ヒール？

どうかで聞いたことあるような。

.....

はっ！？

よくある回復呪文の名前じゃねえかあ！

すると小太刀が抜け落ち、傷がみるみるうちにふさがった。

..... 反則だろ。

「魔法あり、だからな」

口に出てたか。

しかし……

「勝ち目ねえじゃねえか」

だって怪我也すぐ治るんだろ？

「一気にけりをつければいいんじゃないか？」

簡単に言っなよ。

あんた自分の實力わかって言ってるだろ。

「まあもつとも次で決着がつくだろうがな」

なんで？

「フレアランス」

再びアシナの手が淡く光り、炎が出る。

マジ？

炎はものすごいスピードでこちらに迫り俺の体を貫いた。

他人事みたいに言ってるけど実際はものすごい痛い。

俺の本能が体を動かし、なんとか意識をつなぎとめているという状態だ。

「急所をはずしたか。だがもう終わりだ。あきらめろ」

たしかに、な。

そんな時、志摩さんの声が響き渡る。

「生島ア！！

いいのか！？

新島が遠くへ言ってしまうぞー！！」

……………そうだ。

俺の本来の目的。

姫………

痛む体を無理やり立たせる。

「何が、お前をそこまでさせる？
下手すれば死ぬぞ」

たしかに、な。

だが……

「俺は……姫を守るって決めたんだ!!」

すると、刀が光る。

この現象は……

刀身を見る。

徐々に刻まれていく文字。

『参撃放つは降臨せし帝王』

帝……王？

また刀身が光る。

目も眩むような光だ。

光が晴れると目の前に2つの小さな影が。

えーと……何？

『俺達は……』

影の一つが喋る。

よく見ると、すべすべした体表に、つぶらな瞳がちょこんとついている。

小さな足、腕、尻尾。

背中には申し訳程度に翼がついている。大きさは俺の膝までくらいだ。

今、しゃべったのが青色で、

『私達は……』

今、しゃべったのが薄い赤色だ。

『『龍だ!』』

……

「「は?」」

俺どころか、アシナ、観客全てがハモって素っ頓狂な声をあげる。

「いいか？ 龍ってのはウロコびっしりのもっと大きい蛇みたいな
のを言うんだぞ？ お前らぬいぐるみじゃねえか。
つか、どっから湧いてきた？」

俺の問いに無言で刀を指す自称龍達。

.....

勘弁してくれ。

こっちは死にそうなダメージ受けてんだぞ？

帝王って刻まれてんだぞ？

くそつたれ。

もうやけくそだ。

一か八かの特攻だ。

相手が油断してると思ったからな。

しかし、さすが熟練。すでに構えていて、手のひらをこっちにかざしている。

「これで終わりだ。フレアランス」

炎が迫る。

しかしさっきでできた赤色の方が俺の前に立ち、炎を呑み込む。

うそお！？

驚いたのは相手も同じでその場で呆然と立ち尽くしている。

俺は気を取り直し、再び接近を試みる。

近付き、袈裟掛けに斬るがアシナは難なく避ける。

そして態勢を立て直せない俺に剣が振り下ろされる。

しかし今度は青色が俺の前に立ち、防御膜みたいなので剣を防いだ。

今度は相手が驚いたスキを見逃さず、刀を振るう。

からうじて受け止めたアシナだが吹き飛び、観客席の手前で何かに当たり、そのままぐったりとなった。

「アシナ選手気絶！！ 生島選手の勝利！！」

司会の声を最後に俺は気を失った。

目を覚ますと白いベッドの上だ。
体の痛みは……ない。

上半身を起こし、まわりを見る。

どうやら医務室のようだ。

しかし、消毒液の匂いはしないな。

『おう、起きたか』

『起きられましたか』

室内に2つの高い声が響く。

「なんなんだよ、お前ら？」

『『龍』』

.....

まあいい。

それより、

「じゃあ、さっきのはなんなんだ？」

あの魔法と剣撃を受け止めた……

『あれは、俺達的能力だ。俺が打撃を』
『私が魔法を止めるんです』

便利だな。

刀からでてきたってのもあながち嘘じゃなさそうだ。

『それでは、私達は戻らせていただきますね』
『今度俺達が必要な時は名を呼びな。俺はゴン』
『私はドラ』

そういつて2匹は光になり刀に戻った。

2匹あわせて『ドラゴン』ね、てバカ！

.....

む、むなしい。

にしても、あれが帝王なのか？

なんか納得いかないが.....

ところで.....

「ここ、どこだ？」

声に出してみる。

まあ、医務室なんだろうが……

「起きたか。生島」

志摩さんが入ってきた。

「志摩さん、俺どうなった？」

「ん？ 勝ち進んだぞ。今は一回戦が全て終わったところだ」

「次の試合は？」

「1時間後だ。」

それより生島、お前に言っ
てなかったことがある」

……？

「何？」

志摩さんは頬をポリポリと掻き、

「実はな、新島が副賞になったのは私がそう仕向けたんだ」

.....

え？ ええ？

「マジ？」

「ああ」

怒るより先に疑問がわく。

「どうやって？」

「ん？ 大会運営委員会に行って、脅したんだ」

「……………」

すげえ。

まず異世界なのにそんなことができるってのがすげえ。

でも……

「なんで？」

「それについては全員が揃っている時に言いたいが。
まあ各々の強化を図るためだ」

「たしかに強くなっただけださ」

あの2匹の龍は形はともかく能力はすごいと思う。

「私はちよつとしたことで神器について情報を得たのでな。だから
どうなれば強化できるかが分かったんだ」

「へえ」

納得と同時に怒りがこみ上げる。

「もし、俺が勝たなくて姫がどうかいったらどうするつもりなんだよ？」

「私が優勝しただけの話だ」

すげえ自信。

「でもこれからまだ優勝できるって決まったわけじゃないぞ？」

「それに関しては心配ない。必ず私が生島か水橋が優勝する」

「なんで言い切れるんだ？」

「まあ次の試合で分かるさ」

……まあいいか。

「さあ、第2回戦を始めたいと思います!」

1時間後、俺は再びリングに立っている。

怪我は魔法で治したようだ。

魔法ってすげえな。

「それでは第2回戦始め!」

俺は構えるが相手は何故か様子がおかしい。

「どうしました?」

司会が聞く。

「い、降参します!」

ええ！！？

「おおっと、降参するようです！
生島選手の勝利！！」

……めっちゃ不完全燃焼って感じなんですけど。

「な？ 心配ないと言っただろう？」

リングを降りると志摩さんから声がかかる。

「なんで？」

「お前は1回戦で優勝候補筆頭のやつを最後は圧倒的に倒したからな。並のやつは逃げ出すに決まっている」

なんか納得いかないなあ。

「そっいうわけだ。だからお前は次の水橋相手の準備でもしておけ」

その後水橋も試合に勝ちすみ、次は俺と水橋の試合になった。

……あいつと本気でやるのって実は初めてなんだよな。

18話：帝王来たりて（後書き）

キャラ募集中です！

19話：炎の舞、水のせせらぎ

「それでは準決勝！ 生島選手 対 水橋選手 始めて下さい！」

司会の人言う。

向き合う俺と水橋。

じりじりと殺気をぶつけ合い、牽制する。

先に動いたのは俺だった。

一気に距離を詰め刀を振り下ろす。

だが簡単に横に避けられた。

予想済みだ。

俺は次は刀を横に振るう。

態勢が整ってないので受け止めるしかない水橋。

ギリギリと刀身と槍の柄で鏝迫り合いをする。

ぐつと力を込め押す。

だが力は互角だ。

びくともせず、中心で動かない。

俺は力を抜き自ら力の均衡を崩す。

水橋は急に崩れた均衡にバランスを崩す。

俺は追い討ちをかけるように足払いをかける。

そのまま転げるかに見えた水橋だが、アシナと同じようにして受け身をとり距離をあけた。

「はっはっ！」

楽しいぜ！ 生島」

挑発のつもりか会話をしようとする水橋。

「ああ、そうだな」

律儀に応える俺。

「だがお前は本気を出していないはずだ」

……？

「どういうことだ？」

「とぼけるなよ。」

あの試合で見せた力を出せ」

……ドラとゴンか？

まあいい。

「ドラ、ゴン。

出番だぞ」

たしか名前を呼べって言ってたよな？

刀から光が2つ出て、地上に降り立った。

『呼ばれて飛び出て』

『パンパカパン』

……殴るよ？

お前ら。

『『マジ、すみません』』

口に出てたか。

「それだよ。生島！」

喜ぶ水橋。

「行くぜ！ しずくちゃん？ 実は炎爆陣はこういう使い方も出るんだぜ」

何故に稲葉が出てくる？

だが槍の穂先から出てきた炎は真っ直ぐ向かってくる。

「ドラ」

ポツリと呟くと赤い方が俺の前に立ち、炎を飲み込む。

水橋は口笛を吹き、

「さすがだな」

まあ……な。

下ではしゃぐこいつら見てるとさすがって言葉も皮肉に聞こえるが……

ちょっとここからは俺、水橋望視点で行かしてもらっぜ。

1・2回戦を軽々と突破して準決勝の舞台に立つ。

準決勝は生島が相手。

ワクワクしてきた。

1回戦で見たあの圧倒的な力。

それをまざまざと今見せつけられている。

最初出会った時は2つ目も使えず足手まといだったはずなのに……

とんとん拍子に力を覚醒していきやがった。

悔しい反面嬉しくもある。

生島に黒甲冑に志摩姐さん……

世の中はまだ強い奴だらけだ。

そう思うと嬉しくなる。

そんな時だった。

槍が光り出す。

おお！？

生島も驚いて手を出さない。

柄に文字が刻まれる。

『参撃放つは業火の舞踊』

業火の舞踊？

槍の穂先と柄の先から火が出る。

……なるほど。

俺は頭の上で槍を回した。

全方位に火が広がる！

「ちょ、ドラ！
早く早く」

水橋の槍が光ったと思ったら炎が槍の両端から吹き出した。
それを頭上で振り回す水橋。

当然炎は全方位に広がる。

だから……

『こんなにいっぱい無理ですよ』

頑張れドラ！

急に炎が途切れる。

「どうした？」

俺は戦いの最中ということも忘れ声をかける。

「いや、これじゃ埒があかないからな」

そう言って槍を地面につける。

……？

「炎爆陣」

するとリングの四辺に炎が壁になり観客席とリングとを隔てた。

「ここでやれば逃げ場はねえだろ？」

……やばい。

私は武道家大会を見に来ています。

戦う理由……それが見つかるかもしれないと思ったからです。

そして1回戦で早くも心が動きマシタ。

生島クンの強さ、そして戦う理由……

すばらしいものだと思います。

そして今日の前で戦っている水橋クンも戦う理由がありマシタ。

私は……本当に逃げていただけです。

でもこの勝負を見れば……何か分かりそうです。

「炎爆陣」

え？

なんと見えなくなってしまったではありませんか。

見たい見たい見たい見たい。

そんな気持ちが心に溢れてきます。

そして私は分かりマシタ。

今の私は……戦いを否定していないということヲ。

銃が光り出します。

銃身に刻まれる文字。

『参撃放つは大海原の揺らぎ』

大海原の……揺らぎ？

私はとりあえず銃を構え撃ちました。

すると、どうという原理かわからないデスガ、銃口とはくらべものに

ならない大量の水が、津波のように魔法防御膜をすり抜けて、リングに襲いかかりマシタ。

炎が全て消え2人の姿があらわになりマシタ。

.....

えーと、俺はたしかに炎に囲まれて、逃げ場なくてピンチだったんだ。

でもいきなり水が俺達に降り注ぎ……いや、襲いかかり、炎を消したんだ。

まあ俺達もびしょびしょなんだが……

水橋ではないな。

あいつもきょんとしてるし。

水だったら良平だよな？

見ると銃構えてるし。

「おい、良平何してくれんだあ！！」

水橋も気付いたか。

「何勝手にあなた達だけで楽しんでるんデスカ！？
私達も見たいデス」

正論だな。

これはあくまで大会なんだから。

それよりそろそろ再開しないか？

「だからってあんなことする必要ないだろお！」

早くしよつぜ。

「あ！ しずくちゃん。俺の活躍見ててくれた？」

……早く。

「もお最高だったでしょ！？ でもまだ本気出してないんだよ！」

……

「それよりどう？」

水も滴るいい男ってやつだよ。今の俺」

……俺は無視？

「しずくちゃん！

優勝したらご褒美のキスお願いね！」

……

……

俺は水橋に近寄り首に手刀をおとした。

気絶する水橋。

「み、水橋選手気絶！ 生島選手、決勝進出！」

司会も戸惑う急展開。

当然会場もブーイングの嵐だ。

「準決勝がそんなでいいのかー！」

「金返せー！」

「武道家大会なめんなあ！」

ブーイングを起こした観客に俺のたった行動は一つ。

「うるせえ！！！」

逆ギレだった……

こんなオチですいません。by 作者

19話・炎の舞、水のせせらぎ（後書き）

真面目にこんな才子ですいません

20話：優勝者は……？（前書き）

閲覧数2000人突破ありがとうございます。

今回は題名と中身はあまり関係ありません（汗）

20話：優勝者は……？

「では、いよいよ決勝戦を行いたいと思います！」

水橋との勝負から1時間。

もう陽が落ち暗くなっている。

照明が俺達を照らす。

対峙するのは志摩さん。

「それでは決勝戦！ 始めて下さい！」

司会の人が始宣言をする。

だが志摩さんはいきなり口を開く。

「生島ア。この大会で何か変わったか？」

「ああ」

いっぱい変わったね。俺のこと、水橋のこと、良平のこと。

全てが正しい方向に向かったと思う。

それは全て志摩さんのおかげなわけで。

「ありがとうな。志摩さん」

志摩さんはフツと笑う。

「よくわかったようだな。おい司会。私は降参する」

へ？

「「はい？」」

会場にいた人全てが啞然としている。

こ、降参？

「なんで？」

「私の目的は達成したからな。もう用はない」

目的？

あ、俺達のことか。

まあ、でも志摩さんは納得しても観客はよりによって決勝戦が降参で終わったわけだから、納得しないわけであって。

「決勝がそんなんでいいのかー!!」

「金返せー!!」

「武道家大会なめんなー!!」

それを聞いた志摩さんのとつた行動は

「うるせえ!!!」

逆ギレだった。

……この展開はどっかで見たな。

あ、俺がやった展開だ。

「これより第112回 武道家大会の表彰式を行いたいと思います」

結局決勝戦は志摩さんの降参で決着になった。

……今気付いたんだけど、優勝したのって俺なんだよな？

まともに戦ったのってアシナだけだから実感が全然わかないんだが。

「それでは3位。

水橋 望選手です」

巻き起こる拍手。

あれ？

いつ3位決定戦やったんだ？

「決勝戦の30分ほど前にやったんだぞ。水橋の圧勝だった」

後ろにいた志摩さんが応える。

「そうですか」

次は2位の発表だ。

「続いて2位。

志摩 静代選手」

また拍手がおこる。

「さあ、優勝者の発表です。
生島 北斗選手です！」

微妙な拍手がおこる。

……まあ、優勝を認めたくない気持ちは分かるよ。

俺は表彰台に登る。

「賞金と副賞の授与です！」

まず賞金を貰う。

しっかりと受け取る。

「続いて副賞の授与です」

檻が開けられて、既に起きた姫が出てくる。

姫は表情から事態を理解出来ているということが分かる。

すると姫はこちらに来ず、何故か司会に近づき、耳元で何か言う。

「おおつとー!!」

副賞の方から優勝者に「褒美のキスを捧げたいとのことですよ!」

はあ!!?」

いやいやいやいや

ちょっと待てよ。

俺は他のやつに助けを求める。

志摩さん……だめだ笑ってる。

水橋……だめだ、稲葉に夢中だ。

良平……だめだ、顔を合わせようとしない。

稲葉もだめ。イリエはいない。

……なんで？

「キース！ キース！ キース！ キース！」

観客がキスコールをする。

貴様ら俺の優勝に納得してなかったんじゃないのか？

会場全てが俺の敵のようだな。

え？ っていうかどうしょ？

徐々に姫が近付いてくる。

ああ……

「ヒューー……！」

あああ……

「さて、最後に魔法城よりわざわざ足を運んでくださった王の……」

俺はあまりの恥ずかしさにあとの話を何も覚えていない。

「まったく……」

ひどい目にあっただぜ

場所は変わって宿屋。

ベッドに寝ころび表彰式の悪態をついている。

町の酒場では今大会の祝勝会（？）をしている。

俺は最初ちよつといて、抜けてきた。

志摩さんの酒癖の悪さを知っているからな。

しかし、今日は色々あったな。

ドラとゴン。

水橋に良平。

……あとは選手達や観客達。

みんな燃えたな。

なんだかんだいって出てよかった。

考えてウトウトしているとドアがノックされた。

「北つくん。いる？」

姫だ。

「いるぞ。入れよ」

扉を開けて入ってくる姫。

ちよつと恥ずかしいな。

あんなことの後だと。

「「……」」

き、気まずい……

姫とこんな感じになったのは初めてだな。

「ど、どうしたんだよ？ 姫」

苦し紛れに聞く。

「え〜と、ね。」

その……あの……」

目が泳ぎまわってるぞ姫。

「北つくん。」

ひ、表彰式じゃあんなことしちゃったけど、大丈夫だった？」

……？

「どういう意味だ？」

「だから、その……無理にキスしたみたいになったから」

そう言って顔を俯かせる姫。

俺は姫の頭に手を置き、

「大丈夫だよ。」

ちよっと恥ずかしかったけどな」

姫は上目遣いで言う。

「ほんとに?」

「ほんと」

「よかったあ」

そう言つて顔がほころぶ。

………はっ!?

俺何しようとしてんだよ。

よく考えたら今つて俺と姫だけなんだよな。

だからなんなんだよお!!

「北っくん?

どうしたの?」

俺がどうでもいい葛藤をしていると、姫が話しかけてくる。

「い、いや」

なんで狼狽するんだ俺？

……そうだ。

「姫、これ」

俺は姫が欲しがっていたネックレスを渡す。

何故か結構値がはった。

途端に顔を輝かせる姫。

「わぁ！」

受け取り早速つける姫。

そんなに嬉しかったか。

うんうん、買った方としてはうれしいよ。

「ありがとう！
北つくん」

抱きついてくるな！

欧米か！？

……ぱくってすいません。

でも近いよ。

「ひ、姫。近い」

顔は親指一本分ぐらいしかない。

「ん……」

目を瞑る姫。

え？ キスしろってか？

いやいやいやいや

無理無理。

「姫、何やってんだ」

俺の声を聞いても目を開けない姫。

くそつ。

こうなったら……

俺は目を瞑る。

俺は土壇場で気付いた。

「すう。すう」

……もしかして寝てる？

……

なんじゃそりゃ。

ったく……

でもどうしょ？

疲れて力がでねえ。

もうそのベッドと一緒に寝るか？

別に幼なじみだし、何もする気ないし。

あ、でもお約束で後から来たやつらに勘違いされるんだろうなあ。

俺はそんなことを考えながらベッドに姫を引きずっていき、寝た。

んあ？

もう朝か？

俺は体を起こした。
隣ではまだ姫が寝ている。

あれ？

誰も来なかったな。

んゝ……まあいいか。

「姫、起きろ」

姫を揺さぶり起こす。

姫は体を起こすがまだボォツとしていて、目をこすっている。

「北つくん。」

もう朝？　なんで私の部屋いるの？」

「お前昨日のこと覚えてないのか？」

「うん」

威張られてもな……

「ここは俺の部屋だぞ？」

姫はビシッと固まった。

「ほ、ほんとに？」

「ああ」

「……」

「心配するな。

何もしてねえよ」

「あ、そか。良かった。あはははは……チ」

最後舌打ち聞こえたような。

「とりあえず、酒場行くぞ」

多分みんな帰ってこないということは酒場にいるはずだ。

「うん」

ええい、まとわりつくな！

「……」「」

えーと？

俺と姫は酒場に いるわけだが。

「な、何があつたんだ？」

ぐちゃぐちゃになった木のイスと机。

そして転がっている酒ビン。

もつと転がっているのは人間。

まあ、だいたい予想していたけどな。

つか、水橋、良平、稲葉は未成年じゃねえのか？

「あゝ」

呆然と立つ俺達に恰幅のいい人が声をかけてくる。

「この人達のお知り合いですか？」

「はあ」

「良かった。」

「どうしようか迷っていたんですよ」

「すみません。」

「すぐ運びますんで」

「多分これが気になっていたんだろう。」

「いえ、そうじゃなくて。代金の方を……」

「……あ、よく見ると知り合いじゃねえや。」

「すみません、この人らに皿洗いでもさせて代金返さして下さい。じゃー!」

主人の答えも聞かず姫の手を取り一目散に逃げ出した。

「はあはあ。」

「いいの? 北つくん」

「まあ、バカしたあいつらが悪いんだよ。自業自得だ。」

多分、あいつらに殺されるだろうけどな。

とりあえず、ここにもう少し滞在することになった。

この時やめておけばよかったと後悔することになる。

21話：一緒の顔って3人はいるらしいよ（前書き）

今回は次のフリなので短いです

21話：一緒の顔って3人はいるらしいよ

大会から2日経ち、俺達はまだ魔法都市にいた。

理由は簡単。

今頃志摩さん達は皿洗い頑張っているんだろうなあ。

志摩さんは金に関してはきちんとけじめとる人だし。

「北つくん。おはよー」

まだ寝ぼけまなこで降りてきた姫。

「お？ おはよう」

姫はきよろきよるとまわりを見て、

「しずちゃん達はまだなの？」

しずちゃん？

……ああ稲葉か。

「まだだぞ」

「そっか。」

じゃあ北つくん。
また市場いこ！」

「いいけど。なんで？」

昨日も行ったのに。

「だってこんなにゆつくりできるの久しぶりだよ？
それにこの世界、珍しいものいっぱいだし」

たしかに。

「そおだな。」

じゃあ朝飯食べたら行くか」

「うん！」

すごい笑顔だな。

「いらっしやい！

いらっしやい！

ただいま全商品9割引だよ！」

9割引！？

なんだ？ 閉店セールか？

「買った方にはもれなく呪詛のネックレスもついてくるよ！」

明らかに呪われてるものつけるなよ……

9割引ってこれ売りたいだけなんじゃ……

「北つくん、お得だよ！ 9割引だよ！」

「食いつくな！」

ポカッと頭を叩く。

「あは、冗談だよ!」

目はマジだったような。

「すみません」

は〜……もう無視。

「すみません」

声の方をチラッと見る。

フードを目深にかぶつたいかにもうさんくさい輩。

「姫、もういいだろ? 帰るぞ」

とりあえず無視する方向で。

「すうみいまあせえん!!」

なんだろ？

久しぶりにゆるい空気にどっぷり浸かったからか、かけられた声に反応しそうになる俺がいる。

「なんですか？」

姫、何故お前が応える？

「だって北つくん、1人でぶつぶつ言ってたから」

口に出てたか。

「はあ、やっと反応してくれました」

フードをかぶったまま安堵のため息をはく誰かさん。

「んで？ なんですか？」

「ああ、すいません。あの……とりあえず場所を変えていただけないでしょうか？」

？　なんでだ？

「まあ、ちょうど宿屋に帰るところだったから」

「助かります」

今気付いたけど、声は女だな。
姫の声に近い。

で、宿屋。

俺の部屋にいる。

俺と姫はベッドに腰掛け、誰かさんはイスに座っている。

「とりあえず、そのフードを取って下さいよ。さすがに怪しいです」

ここに来るまでも異常なほどまわりを警戒していて、かえって怪しかったしな。

宿屋の人には愛想笑いでごまかしたけど……

「すみません。」

「……ここなら大丈夫ですよね？」

そう言ってフードをとる。

「……は？」

「わ、私の顔がある」

目の前には姫そっくりの顔。

でも髪は金色だな。

「はい、私もびっくりしました」

「それで、名前は？」

「ヒラネニミオです」

へえ。

ん？ 姫が目をめっちゃ見開いているぞ。

「も、もしかしてお姫様！！？」

何言ってるんだ？

「あ、はい」

へ？

「北つくん！ 何ボケーンとしてるの？
本物のお姫様だよ！？」

「何言つてんだよ。つうかここに城なんてあったか？」

「北つくんこそ何言つてんの？」

大会の後に王様が挨拶してたじゃん！
ヒラネキオって王様が」

聞いてなかったな。

「もう！！」

「つうかお前のせいだろ？」

「なんで？」

……こいつ。

恐るべし天然。

「まあいい。

んで、お姫さん。
俺達に何の用？」

「あ、はい。

折り入ってお話が」

「「何？」」

声が重なる俺と姫。

「あの……私を仲間に入れて下さい！」

「「……」」

え？ 仲間に入れて？

「あの……え？

仲間に入れてって、なんで？」

あまりの突然さに頭が上手くまわらない俺。

「私は今の生活に飽きたんです。だから……」

理由はありきたりだな。

「ちょっと落ち着いて下さいよ」

なだめようとする俺。

「すみません！」

そういつて抱きついてくる姫さん。

なんだよ？ この突然さは。

「あ、ずるい！」

おい姫、そこは普通嫉妬に燃えるんじゃないのか？

便乗して抱きついてどうする？

………
つか。

前に姫さん。後ろに姫。

や、やばい。

「と、とりあえず姫。姫さんを落ち着かせろ、な？」

俺は理性が本能に勝っているうちに全力で2人を振り切り、部屋を出た。

つか……

普通、似ている2人がいる時ってお約束で、立場をいれかえるってのが王道なんじゃないのか？

22話：メイドって実はメイドらしいよ

「北つくん、もう大丈夫だよ！」

俺が部屋を出て10分弱が経った。

その間はぼおっとしてたわけだけどね。

「どうだ？　落ち着いたか？」

「うん、大丈夫。」

ミオちゃんも大分落ち着いたよ！」

こいつ、もう仲良くなったのか。

まあ、これも一種の才能だよな。

中に入ると静かに座っている姫と姫さん。

「あの……紛らわしいので私のことはミオでいいです」

おっと、口に出てたか。

たしかに紛らわしかったな、うん。

「じゃあ、ミオ。

とりあえずさっき言った意味を教えてくれ」

仲間に入れてくれてな……

「はい。

私は知っての通り、この魔法都市の魔法城城主の娘。つまり姫になります。

幼いころからの様々な貴族のたしなみを勉強してきました。

でも私は正直嫌だったんです。

普通に町の子達と遊びたかった……

その希望は今になっても変わりません。

だからあなた達の仲間に入りたいんです」

長台詞ご苦労様、ミオ。

しかしなんつうか俺には分かん悩みだな。

そういう生活をしないと平民には分かんだろう悩みだ。

「でもなんで俺達なんだ？」

「それは、うちのメイドの方々がなんていうか武道派な方達ばかりなんです」

出たメイド！！

「どついう意味だ？」

いまいち関連性が分からん。

「今までも町の女の子達と何回か逃走を企てたんですが……全て阻止されて」

要は逃げられなかったんだな。

「で、なんで俺達？」

「武道家大会に優勝した方々ならうちのメイドからも逃げられると思っただからです」

そういうことか……
ん？

「なんで今までその手を使わなかったんだ？ 別に俺より強いやつもいっぱいいただろ？」

「それは……その。今までの優勝者の方はむさいというか……近づくだけで妊娠しそうな方ばかりだったんです」

な、なるほど。

つうかよくそんな言葉知ってたな。

「それにあなたなら、私のその……」

もじもじしながらなんか言っているミオ。

？

「なるほどねえ」

何に納得したんだ？ 姫。

「まあ、俺は別になんでもいいが……」

正直中途半端な気持ちじゃ危ないかはついてきてもらいたくないんだが」

黒甲冑みたいなのがまだいるかもしれないから……

「私は……別に生半可な覚悟ではありません。
足手まといにはなりません！

こつみえて回復魔法の腕は一流なんで すよ」

そつといえばこの世界って魔法つてものがあるんだよな。

「俺は別に構わないと思うが……姫は？」

「私は全然いいよ！ 女の子増えるのは嬉しいし」

「あとは志摩さん達だな」

あ、思い出した瞬間背筋に寒気が……

俺どうなるだろ？

「そつえば、皆さんはどこに行かれるのですか？」

あ、俺達って異世界から来てたんだよな。

とりあえず俺達の旅の一部始終をミオに教えた。

「世にも奇妙な話ですね」

まあ、自分で信じらんねえからな。

「とりあえず志摩さん達が終わるまでのんびりしよつぜ」

さすがに置いていったらマジ殺されるからな。

その時、俺達の部屋がノックされた。

「お？ もう終わったのか、志摩さん達」

俺はドアを開けた。

……………え〜と

一言で表すならメイドがいた。

俺はそっち方面に疎いから描写出来ねえが、一般的なメイドと違ってくれ。

「お休みのところすみません。こちらにうちの脱走した姫様がいると通報がありましたので」

ニツコリと、所々表現がおかしい言葉を言うメイドさん。

黒い髪が眩しいです。

「そんな人いませんよ。誤報じゃないんですか？」

「では、失礼ですがお部屋を探索さしてもらいます」

そっいつて俺の肩をつかみどかせようとするメイドさん。

ちょ、力強いって。

その細腕からは考えられない力だ。

まあ、さすがに負けてられないけど……

抵抗したら怪しまれるし、な。

「どうしたの？」

お、姫が出てきた。

「こいつと間違えたんじゃないんですか？」

姫を指さし言った。

メイドさんは少し目を見開く。

「たしかにそうかもしれませんが……」

何故あなた達は姫様の顔が分かったんです？ この町の方ならともかく旅人のあなた達が」

この人するどい。

そして更に言った。

「姫！ こんにちはが上から落ちてきますよ！」

……は？

「きゃあああ！？」

何故悲鳴をあげる！？

俺と姫は急いでミオのところに行く。

ミオはうずくまり震えていた。

「こんにちははいや。こんにちははいや」

何があつたんだよ？

「やはりいましたね」

部屋にずかずかと入ってくるメイドさん。

「さあ姫様。

城に帰りましょう」

「い、嫌です！」

まだこんなにやぐで震えているミオ。

「逃げましょう。2人とも」

そういつて俺の手をとるミオ。

「逃がしませんよ」

そういうとメイドさんが他にもぞろぞろ入ってきた。

「外にも包囲網が完成しています。
あきらめて城に帰ってきてください」

ん。どうしよ？

「北つくん、これ」

姫が煙玉と暗視ゴーグルを出す。

なんで持ってたんだよ……

でも、

「ナイス姫！」

俺は暗視ゴーグルを装着し、煙玉を炸裂させた。

広がる煙。

俺は出口をふさぐメイドさんに軽く殴って気絶させ、部屋を出る。

後ろから同じく暗視ゴーグルを着けた姫とミオが出てくる。

「この勢いで逃げるぞ！」

俺達は宿屋を出ると同時に煙玉を再び炸裂させる。

俺は再びメイドさんを気絶させ、逃げ道を作り、そのまま逃走する。

「ここまで来れば大丈夫だろ」

俺達は町の郊外に来ている。

心なしか城に近づいている気もするが。

「大丈夫ではありません！ 来ましたよ」

ドドドドと効果音をあげながら追いかけてくるメイドさん達。

皆さん、目が血走ってます。

「生島ア!!」

あれ？ 幻聴かな？

.....

し、志摩さんだ。

後ろには良平、水橋、稲葉が一緒にいる。

「「ぶつ潰す!」」

みんなめっちゃ怒ってます。

つか『殺す』って表現しないところがリアルで怖い。

「やばい！ 死ぬ気で逃げるぞ！」

志摩さんとメイドさんは一緒に追っかけてくる。

マジ怖ええ。

俺と姫とミオは真っ青になりながらも走る。

あ、どんどん城に近づいてるな。

引き返すわけにもいかないが……

いかめしい城門が見えてくる。

「北斗さん、城に近づいてます」

ミオが言う。

つか、何気にミオって体力あるよな。

俺と姫についてくるんだから。

「たしかに、な。

でもあそこを突き抜けられるか?」

後ろを指差し言う。

「む、無理です」

だろ?

「このまま、城に入ってなんとか脱出するぞ」

た、多分入り組んでいるだろ。

「分かりました!」

城門まですぐそこだ。

って、城門閉まってる。

「なんで城門閉まってんだ!？」

「泥棒が入らないようにです」

学校か!？

つかどうしょ？

「こつなりやいちばちだ!」

俺は刀を抜き、空を斬った。

紫の衝撃波が城門にぶち当たる。

しかし城門はびくともしない。

「マジ?」

びくともしないってのは……

「城門には魔法がかかっています。
生半可な攻撃じゃ無理です」

絶体絶命だ。

城門を背にメイドさん達と志摩さん達に囲まれる。

こうなったら

「ドラ！　ゴン！」

俺は2匹を呼び出す。

『呼ばれて飛び出て』

「それいいから！
防御膜張って！」

『いいけど、多分』

「いいから早く」

何か言いかけたゴンを遮りせかす。

『はいはい』

俺達と志摩さん達のちょうど間に防御膜ができる。

「ふんっ」

志摩さんの一撃が防御膜を破砕する。

……え？

「マジ？」

『俺の防御膜じゃあの人の一撃は防ぎきれないと思ったからな』

冷静に言うゴン。

『で、では私たちは帰らしていただきますね』

ドラがそういうと2匹は光になり刀に戻った。

やばい。

「生島ア、よくも私たちを売ったな」

いや、それはそっちが悪いって。

「覚悟はいいか？
塵に帰してやる」

目がマジだよ。

そんな絶体絶命の時、一本の矢が間に刺さった。

「「？」「」

矢には紙がついてある。

しかし城門はびくもしない。

「マジ？」

びくもしないってのは……

「城門には魔法がかかっています。
生半可な攻撃じゃ無理です」

絶体絶命だ。

城門を背にメイドさん達と志摩さん達に囲まれる。

こうなったら

「ドラ！　ゴン！」

俺は2匹を呼び出す。

『呼ばれて飛び出て』

「それいいから！
防御膜張って！」

『いいけど、多分』

「いいから早く」

何か言いかけたゴンを遮りせかす。

『はいはい』

俺達と志摩さん達のちょうど間に防御膜ができる。

「ふんっ」

志摩さんの一撃が防御膜を破砕する。

……え？

「マジ？」

『俺の防御膜じゃあの人の一撃は防ぎきれないと思ったからな』

冷静に言うゴン。

『で、では私たちは帰らしていただきますね』

ドラがそういうと2匹は光になり刀に戻った。

やばい。

「生島ア、よくも私たちを売ったな」

いや、それはそつちが悪いつて。

「覚悟はいいか？
塵に帰してやる」

目がマジだよ。

そんな絶体絶命の時、一本の矢が間に刺さった。

「「？」」

矢には紙がついてある。

矢文ってやつか？

俺は紙をとって広げる。

そして声に出し、読んだ。

『月×日、午後11時に神器の杖をいただきに参ります。』

怪盗エリ』

おお。今時こんなことするやついるんだなあ。

でもメイドさん達はめっちゃパニックっている。

「なんであんな慌てているんだ？」

ミオに聞く。

「怪盗エリとは近頃、色々な地方で見かけられる怪盗です。今まではその姿はおるか、声も聞かれずに厳重な警備を抜けて宝を盗み出すんです」

「へえ」

まあ、これで俺達のピンチは回避されたな、うん。

メイドさん達はどっかに散ったし。

「だが生島、私たちはお前を許したわけではないぞ」

黒いオーラを出しながら来る志摩さん達。

その後俺はボッコボコにされた。

理不尽だ！！

23話：王様ゲームは二十歳になってから

今俺達は城の玉座の間にいる。

ちなみに前回のリンチの傷はミオに治してもらった。

久々に三途の川をみたな、うん。

それで……なんだっけか？

あ、前回の矢文の件で俺達は国に半強制的に協力することになった。

「さて、諸君。

これより我が城の宝庫に24時間体制で警備を行ってもらっ

今玉座に座りながらしゃべっている人は王様らしい。

まあたしかに大物オーラが漂っている。

「では各々警備にあたってくれ。それと、生島という者とその一行は残ってくれ」

お、王様から直々にお呼びだしって……

メイドさん達がそろそろと持ち場につく中、俺達は更に玉座に近付く。

「君が生島くんかね？」

さっきと違い普通のおじさんの声。

「は、はい」

俺の方は若干緊張気味だ。

「すまなかった。娘のミオが迷惑をかけたようで」

いきなり頭を下げる王様。

つて、ええ！？

「あ、頭を上げて下さいよ。別に迷惑なんかじゃありませんでした

よ
「

どっちかというとバーサク化した志摩さんやメイドさん達の方が迷惑だったよ。

「そう言ってくれるか。ありがたい。

ところで君達の旅は急ぐものかね？ 違うなら是非警備を手伝ってほしいのだが…… もちろん警備の成功失敗に関わらず報酬は出そう」

「もちろんいいですよ」

矢文に書いてあった神器が気になったからな。

それに報酬も出るなら一石二鳥だ。

「やってくれるか。では君達はミオの部屋周辺を警備してくれ。娘の身に万が一があっては困るのでな」

「わかりました」

そう言って持ち場につこうとすると、

「ちょっと待ってクダサイ」

良平が止める。

「どした？ 良平」

「王様。私は自由に動いていいですか？ 少し気になることがありますノデ」

気になること？

「まあいいだろう。城内を自由に動けるように取り計らっておく」

「助かります」

そして俺達は良平と別れ、ミオの部屋へ向かった。

良平は何を聞いても曖昧に笑っただけだった。

「ミオ？ いるか？」

ノックして入る。

「北斗さん、姫も。そ、そちらの方々は？」

あ、ミオはバーサク化した志摩さん達しか知らないよな。

「ああ、知っているだろ？ 志摩さんだ。今回の件でミオの警備に当たったんだ」

「そうだったんですか！ どうぞお入り下さい」

俺達を部屋に招き入れるミオ。

中は意外にも質素な感じだった。

もうちょっとシャンデリアとかあると思ったけどな。

「私は質素が好きなんです。

あといくら王族でも部屋にまでシャンデリアはないと思いますよ」

口に出てたか。

でもまあそうだよな。

さて、約束の時間まではあと9時間か……

ぶつちゃけヒマだな。

「なあみんな！」

水橋から声があがる。

「ヒマだろ？

じゃさ、これやる！　これ！」

「ごそごそと割り箸を取り出し、

「姫様と親睦を深めよう！ 王様ゲーム」

「「……」」

下心丸見え。

親睦を深めようって、なんで王様ゲームなんだよ。

「あれ？ みんなやらない？」

やるわけねえだろ！

「面白そうですね！ やりましょう！」

ええ！？ ミオ？

「だって私のためにやってくれるんですよね」

違うつて、そいつは自分自身の欲望のために……

「さつすが姫様！

さあ、やりましょう」

みんなを集める水橋。

「私は遠慮しておく」

さつすが志摩さん。大人だ。

「私が下になるなど考えられないからな」

……

「では、始めよう！」

各々がしぶしぶと割り箸をひく。

「王様だ〜れだ？」

ノリノリだ。水橋のやつ。

……俺は2番か。

「お？ 早速俺だ」

水橋のやつ仕組んでたんじゃ。

「じゃあ、出始めに3番が2番にキスで」

2番って俺じゃねえか。

つうか男女比おかしいだろ。

「あ、3番私です。」

ところで何をするんですか？」

ルールを知らずに参加したのか。ミオ。

「王様ひいた人の命令に絶対服従するゲームだよ。今はミオさんが2番の人にキスするんだよ」

「まあ！！」

上品に驚くなよ。

「で、3番は？」

.....

「私は4番だよ」

「私は1番だ」

「「ということは」

一斉に視線が集まる。

「俺だよ」

くそつたれ。

もうどうにでもしろ。

「じ、じゃあ私が北斗さんにキスを？」

「そうだよ」

「じゃあ失礼します」

頬に当たる柔らかい感触。

……はあ。

最近、女難の相が出てる気がする。

時間が移り、約束の時間まであと10分となった。

王様ゲームはなかなか続いた。

もっとも何故か水橋が命令に関わることはなく、どんどん元気がなくなっていくたが……

だがおかげでミオは水橋とも稲葉とも仲良くなれた。

良平がいなかったのは残念だったが。

「いよいよだな」

つかこの部屋は宝庫から離れているから大して何もしてないんだよな。

カチカチと時を刻む時計。

.....

.....

.....

さて、ここからは私、良平視点でお送りします。

気になることがあって、生島くん達とは別行動をとっているわけですが。

とりあえず約束の時間まであと1分となったのでおいおい説明したいと思います。

私は今宝庫から少し離れた小部屋で待機しています。

鐘が11時を告げマシタ。

宝庫から爆発音が響きマシタ。

私は小部屋をでマス。

外ではメイドさん達が所狭しと走り回っていまシタ。

「どうなっ たんです力？」

近くにいたメイドさんに現状を聞きマス。

「いきなり爆発が起きて、気付くと神器がなくなっていたんです」

でも落ち着いているあたりさすがですネ。

「分かりマシタ」

そんな時1人のメイドさんが声をあげマシタ。

「あ、あそこ!!」

気球みたいなのが飛んでいます！
城門の方へ向かっています！」

たしかに気球が飛んでいて、人がぶら下がってイマス。

メイドさん達は一斉にそれを追っていきマシタ。

.....

私は城門とは反対の裏口に来てイマス。

ほとんどさびれたそこは使っていないということを表してイマス。

私はある人物を待ってイマシタ。

足音がしマス。

「ここで待っていたら来ると思いましたヨ」

そう、私は泥棒の正体を知ってイマシタ。

「イリエさん？」

メイド姿のイリエさんがあからさまに目を見開きマシタ。

「何故、あなたが」

「FBIの息子をなめないでくだサイ」

別にどうでもよかったんですが、軽く自己紹介のように言います。

「あなたはまず爆発を起こし、煙に紛れて神器を取り、メイド姿になって囷と反対方向に逃走を企てたんですネ」

気球を見つけたのはおそらくイリエさんでしょう。

「驚いたよ。」

まさか全て見破られるなんて」

「イエ、あなたが盗んだ物をどこへやったかは分かりませんデシタ」

神器は触れば担い手になるはずデス。

「それは私特有の魔法、伸縮魔法を使っただよ。こんな風にね」

そついうとイリエさんの手から布で包まれた長いものが現れマシタ。

「なるほど、そついう知識はありませんでしたネ」

「ちなみに神器は2つ持ってるよ」

出会った時の会話を思い出しマシタ。

『ナタはウエチストのどこかにあると言われていました』

過去形になっていたのを気になったことを覚えてイマス。

そういうことでした力。

「私達は隠れ蓑にちょうどよかったわけデスネ」

「まあ、ね。

で？ どうする？

私を捕まえるの？」

あまり考えていませんデシタ。

「そうですネ。

このまま捕まえるのが普通ですが、これからは私達の旅にはついてこないンデス力？」

「そうね。

あ、でも魔城の宝は興味あるなあ」

「ならばついてきてクダサイ」

情報を多く持っているのは貴重ですからネ。

「分かった」

「あと、神器は元の位置に戻しておいて下さいネ」

「ええ〜!？」

露骨に嫌がるイリエさん。

「いいんですヨ、あなたの顔写真が世界中に出回っても」

ちょっと卑怯な手ですが。

「うっ」

「今までよりかなり動きにくくなりますヨ?」

「……分かったよ」

うん、一件落着ですネ。

んあ？ 朝か。

結局11時になるのを待たずに寝たのか。

……なんか、情けねえ。

みんなも寝てるな。

「姫、ミオ、起きろ」

2人の頬をペシペシ叩く。

こうしてみるとほんと双子みたいだな。

………はっ！？

やばいやばい。

最近俺発情期なんか？

「何言ってるの？
北つくん」

こついう時に限って口に出るんだよな。

「発情期なら私を好きにしていよいよ？」

………さて発情ネコは置いといて。

「ありゃ？ また無視？」

やかましい

「ミオ。ミオ。起きろ。朝だぞ」

「あと5分」

寝言を言うミオ。

「ミオ、その5分ってのは絶対1時間以上になるんだぞ？」

俺は目覚まし時計にそう言って、気づいた時には1日が終わってたぞ？（実話）

「やゝ！　こんにゃくいやあ！」

だからこんにゃくで何があったんだよ？

「はっ！？　北斗さん。おはようございます」

「おはよう」

水橋と稲葉も起きていた。

残るは志摩さんだな。

……あきらめよ。

「みんな、とりあえず顔洗って玉座行くぞ」

昨日のこと気になるしな。

その後、顔を洗っている時に水橋が志摩さんにいたずらしようとしてボコボコ（志摩さんは寝たまま）にされた。

24話・学校って休み長いと早く始まってほしいと思うよね（前書き）

今回はキャラ募集で募集したキャラが登場する実験的な話です。

チビヨッシー様、治した方がよいところの御指摘をよろしくお願い
します。

24話：学校って休み長いと早く始まってほしいと思うよね

俺達が玉座の間に行くと、いたのは王様だけだった。

「パパ、怪盗さんはどうなったの？」

ミオが王様に聞く。

「ふむ。怪盗は昨夜来たのだが何も盗らずに帰っていったのだ」

なんじゃそりゃ？

「じゃあ被害はなし？」

「うむ。だがメイド服が一着なくなっていたが……」

え？ 怪盗って変態だったの？

「へえ」

「ところで生島君、君はこれからどうするのかね？」

ん、報酬ももらったしなあ。

ここにいる理由は……

「あら？ もう行ってしまわれるのですか？」

玉座の間に美しい声が響く。

声の主は見知らぬ女性だ。

だが外見から、ミオの母親だろうということが分かる。

「おお、ナニ。

紹介しよう、私の妻でミオの母、そして魔法学校の理事長のナニだ」

……魔法学校ね。

「ちなみに名前はホグワ

「あなた、そのボケは冗談ですみませんよ」「

まったくだ。

「はじめまして。

私はミオの母親で魔法学校『オグワルド』の理事長をやらしてもらっています」

本当の名前も結構ギリギリじゃねえか。

「あなた達、もしよろしければ、『オグワルド』の授業に出てもらえませんか？」

「いいですけど、なんでですか？」

「神器を持つ方などそうそういませんわ。生徒の前には是非出てほしいのです」

なるほど。

「あゝ私はパスだ」

「なんで？ 志摩さん」

「学校に入るとじんましんが……」

あんた教師だろ……

「俺としずくちゃんもパスね」

水橋が言う。

「私も魔法都市に興味はあるのでな。
こいつがいると妙な男が寄り付かない。……いちいち始末が面倒だからな」

こ、後半のボソツと部分がめっちゃ怖いんですが。

「ってことは行くのは私とミオと北つくんだね！」

そうだな。

ん？

「そつえば良平は？」

「良平君なら連れの……イリエさんとやらと別室で寝てるよ。いやらしい意味ではなく」

いちいち言わなくても分かるよ。

イリエも戻って来てたんだな。

「では、行きましょうか」

そつえば俺達の旅の目的を忘れてきてる気がする……

「ここが魔法学校か」

そこは想像したようなでかい城なんかではなく、普通の学校だった。

グラウンドが異常に広いことを除いて。

「では、入る前にここについて説明しておきましょう。

魔法というのは昔はごく限られた人しか使えないものだったのです。自然とその方々が富を築きました。

現在でもその名残が、良家のお嬢様や御子息が大半を占めています。ですから多少戸惑うかもしれませんが、よろしく願います」

はあ。

要は金持ちの集まりってことなんだな。

まあ入ってみれば分かるか。

中は華やかな雰囲気というのだろうか。

とりあえずほのぼのした雰囲気が充満していた。

栗色のセーターを着た膝丈スカートの女の子やグレーのスラックスを着た生徒が俺達とすれ違う度に恭しく頭を下げる。

まあ理事長だからだろうが。

「礼儀正しいんですね」

「はい。魔法学校はこの1つしかありませんから、自然と他の地方へ行く生徒が多いですから。

礼儀作法は厳しくしております」

なるほどねえ。

俺はふと、1人の女子生徒が目に残った。

廊下の端に寝そべっている何やら猫みたいなのを見ている。

制服の上にはオレンジのポンチョ付き上着をそれを被っていた。

なんとなくだが興味がわいたため近付く。

「やっぱりそうだね」

俺が話しかけたわけではないのにいきなり言葉を発する。

「そういえば、この前あげたかつお節はちゃんと彼女にあげた？」

.....

「え？ 食べちゃったの？ しょうがないなあ。また今度新しいのあげるね」

.....え〜と？

「誰としゃべってたの？」

とりあえず声をかけてみる。

「え？」

彼女は振り向いた。

青い綺麗な髪をしている。

顔立ちは悪くない。

というよりいい。

「さっきから誰としゃべってたの？」

予想はしていたがその答えは怖かった。

「猫と」

予感的中。

……………リアクションできない。

「へ、へえ。」

よくしゃべるの?」

とりあえず会話だ。

「ええ。この子はすごい優しい子なの」

そっとう彼女の瞳は優しげだ。

会話の種が尽きた気がするなあ。

「北つくん!!」

「北斗さん!!」

会話に困っていると姫とミオが強い口調で俺を呼んだ。

「早く行くよ!」

姫がさういうと、俺の首根っこをつかみ、引きずった。

俺何した?

それをオレンジポンチョの彼女とナミさんは笑って見ていた。

25話・目覚めの時は今（前書き）

少し多忙で更新が滞っていました（汗）

25話：目覚めの時は今

俺達はナミさんに連れられて、ひとつひとつの教室をまわった。

1コマ90分の授業に30分づつ出て回る。

6学年の合計18クラスをまわるのは少々きつい。

次は10クラス目。

「失礼します」

そついつてナミさんは引き戸を開ける。

「ああ、理事。
待ってましたよ」

どうやら事情を聞いていたらしい若い教師はさっさと教壇を譲り、自らもイスを取り出して生徒達の後ろに座った。

「では、みなさん。先生から聞いていると思います。
184年前に大戦で使われた神器の後継者の方に講義をいただきます

す」

ナミさんの紹介について俺は神器との遭遇から特徴までを簡単に説明していった。

もう9クラスに同じ説明をしたので慣れた。

そして俺は説明の最中に例のオレンジポンチヨの女の子を見つける。

目を合わせると向こうが軽く笑ったので俺も微笑む。

「「講義中でしょ!!」」

姫とミオが何かで俺の頭を叩いた。

振り返り見ると手にはハリセンが握られている。

.....

「なんてベタなつつこみ道具もってんだよ」

つい口に出てしまう。

「いいから続けなさい！」

なんで姫はそんなにえらそうなんだよ。

「なんでお前がそんなにえらそうなんだよ？」

口に出して聞いてしまう。

「いいから！」

「なんか納得できねえ。つかお前がやれよ」

何か言おうと口を開く姫だが、

「こほん、北斗さん？　続けてくれませんか」

静かなナミさんの声。

こ、怖い。

「え、え〜とでは神器の特徴は……」

結局1日かけて全クラスをまわり、俺はくたくたになった。

先生ってすごいね。尊敬しちゃうよ、ほんと。

「今日は1日ご苦労様でした」

ナミさんが労いの声をかけてくれる。

「そおいえば姫とミオは？」

最後の1クラスをまわり終わると2人の姿が見えなくなった。

「2人なら屋上に行くと言っていましたよ」

屋上か……

「じゃ、俺も行ってきます。先帰っというて下さい」

「では、お願いしますね」

俺は屋上へと向かった。

……

俺が屋上に着くと2人は仲良くくっついて寝ていた。

その顔はこの上なく幸せそうだ。

俺は2人に近付いて頭の近くにしゃがみこむ。

この2人ってほんとに似てるよなあ。

実はどっちかが変装していたり……

馬鹿げた考えをした俺はおもむろに2人の頬を引っ張る。

びよーんと効果音をあげるように伸びる頬。

おお！

面白くなった俺はぶにぶにといじくりまわす。

姫とミオは同じように顔をしかめ、俺の手をつかむ。

へ？

勢いよく引っ張られて2人の間にすっぽりと顔が挟まった。

頭の方から覗いていたわけだから、自然と顔は2人の胸あたりに挟まるのであって……

やばいやばいやばい

この状況は非常にまずいって。

俺はじたばたともがく。

抜けねえ。

だが急に俺は引っ張りだされた。

ゴホゴホとむせたながらも、引っ張りだされた力の元を探す。

「君は……」

視線の先にはにっこりと微笑んでいるオレンジボンチョの子がいた。

「マールです」

「え？」

「私の名前です。」

屋上に来ると影が重なっていたので邪魔かと思いましたが、あなたが苦しそうにしていたので思わず助けてしまいました。迷惑でしたか？」

上目遣いで言うマール。

「いや、別に……つつか助かったよ。ありがとう」

「はい！」

嬉しそうに微笑むマール。

その時いつそう強い風が吹いた。

ポンチョが風になびき、青いポニーテールが露わになる。

思わず俺は見惚れてしまった。

「北つくん？」

「北斗さん？」

……………ゾワッ。

背筋が凍りつき、全身に鳥肌がたつ。

おそるおそる後ろを振り向く。

予想通り、後ろには鬼が2人いた。

「え〜と、ほら。なんだ？ あの………すみません」

たいした言い訳も思い浮かばず、謝ることしかできない俺。

「「問答無用！」」

俺の頭に2本のハリセンがなんども打ちつけられた。

マールはそれを笑いながら見ていた。

なんで俺ばかり……

屋上での一悶着を終え、俺達は玉座の間に来ていた。

稲葉と水橋、良平とイリエ、それに志摩さんは既にいた。

「しずうち、町はどうだった？」

姫……あだ名は1つに統一しろよ。

「いや、こいつを連れて行ったのは間違いだった。スキを見つけては抱きつこうとするのでな。蹴るのが大変だった」

やっぱり金蹴りかい！

「なあ稲葉。

あんまり男のそこを蹴るもんじゃねえぞ？

男として機能しなくなる」

見かねた俺が言ってみる。

「大丈夫だ」

しかし意外なことに、返事は水橋からかえってきた。

「しずくちゃんのおかげで何かに目覚めそうなんだ」

「……………」

え〜と？

水橋、それはMに目覚めるんだと思うぞ。

「どうした？ みんな」

「「なんでもないです」「

どうやらみんな触れないでおこうと決めたようだ。

「そ、それはそうと王様。俺達は明日発とうと思います」

これは志摩さん達と決めたことだ。

「ふむ。そうか……色々世話になったな」

「いえ、俺達の方こそお世話になりました」

俺達はそう言って、玉座の間を離れた。

夜。

みんなが寝たのかは知らないが、俺は寝れずに、夜風を浴びにバルコニーに出ていた。

夜風が気持ちいい。

「あら？ 北斗さん」

不意にミオから声がかかる。

「どうした？ 寝れないのか？」

時刻は深夜をまわっているはずだ。

「ええ、少し……。北斗さん。本当に私を連れて行ってくださいの
ですか？」

「俺な、この数日見ててわかったんだ。ミオは両親から愛されてい
るって」

そう、警備だつたり一日講師だつたり俺じゃなくても出来るはずだ。
おそらくミオを長く引き止めたかったのだろう。

「だから……」

俺は次の言葉を紡げなかった。

あまりにも、残酷で……

「そう……ですか」

「すまないな」

「いえ、北斗さん。2つだけお願いがあるのですが……」

「俺に出来ることなら」

「1つ目は私に……その、キスしてください」

は？

「別に口じゃなくていいんです。」

だめ……ですか？」

くっ、そんな目で俺を見るな。

俺はミオに近付き、触れる程度に頬にキスをする。

夜風がさつきより冷たい気がする。

「そ、それで2つ目は？」

照れ隠しに聞く。

「2つ目は……また、ここに帰ってきてくださいね！」

「わかってるよ」

俺はミオの頭に手をポンと置いた。

26話：装備は用途で使い分けを（前書き）

北「えらく久しぶりだな」

すいません、高2になると、いきなり勉強量が増えて、落ち着くまで時間がかかりかきまして。

北「それはいいとして、何新連載始めたりしてんだ？」

それは……。

あつちは5年程前から日々構想を練ってていつ書こうか悩んで、丁度いい機会だったから……。

北「ほう。ちなみに俺達はどれだけ時間をかけた？」

えーと、思いつきとノリで。

北「やっぱりな……。

まあわかっていたが」

キャラ違います？

北「そんなことはないぞ？

つか、なんであつちは3話くらい連続で更新なんだ？」

やっぱ、書き始めは大切だから……。

後こっちは多分、あつちが行き詰まった時に気分転換で書くと思うよ。

どっちみち後ちょっとで一段落つくし。

北「そうか。まあ頑張れ」

はい、ありがとうございます。

では長々と書きましたが、本編の始まりです。

北「あとがきでも話すぞ」

……マジ？

26話：装備は用途で使い分けを

城でミオと王様達に別れを告げ、城門をでた。

「意外に静かだったねえ」

おそらくミオのことを指しているのだろう。

まあ納得はすぐしたからなあ。

「そうだな」

「北つくん、何かした？」

本当にこいつ変なところで鋭いなあ。

「何にもしてないよ」

「そう……」

なんか納得してないようだな。

まあそれ以上聞いてこなかったからいいか。

しばらく歩くと木の下にうずくまるオレンジ色が見えた。

あれは……マールだな。

「今日はいい天気だね。」

でも明日からは雨みたいだよ。

あ、でもあなた達は雨降った方がいいんだったね？」

……………ん〜。

やっぱ何かと話してるよなあ。

「マ、マール？」

「はい？」

ああ、北斗さんでしたっけ。

待ってたんです。

私も連れて行って下さい」

いきなりだな…………。

「私は別にいいぞ」

志摩さん。

「僕も問題ありませんヨ」

良平。

となりでイリエも頷く。

「お嬢さん。

素敵なオレンジですね！

どうです？

私と…………ハグア」

水橋。

……と稲葉。

「私も構わないよお」

姫。

……あんたらさ、仲間ってそんな簡単に決めていいものなのか？

でも、

「なんでだ？」

「アシナって方をご存知ですか？」

ああ、大会で戦ったやつだ。

「私の兄なんです」

へえ。

へええええ！？

そうだったんだ。

「な、なるほど。」

でも俺らについて来ても、会えるとは限んねえぞ」

「大丈夫です。」

兄さんああ見えてしつこいですから、また出てくるはずなんです」

……いやだな。

「わかった。

行こう。悪いけど時間を無駄にする気はないんでな」

俺達は再び歩き出した。

さ、寒い。

俺達は今、シベルリア雪原にいる。

説明するならとにかく白い！ 寒い！

ちなみに俺以外はみんな鎧が耐寒仕様というわけのわからん設定のため、平気な顔をしている。

くそう、なんで俺のだけ耐熱仕様なんだ。

さすがに魔城に近づいてるだけあって、魔物の数は増えてきた。

つっても、ただの雪ウサギみたいな人が多いだけだけだな。

神器さまさまだよほんと。

相当あるいたと思ったところ、なんか遠くから犬のような鳴き声と何かを引きずるような音が聞こえてきた。

「なんだ？」

俺達は立ち止まる。

徐々に音は近くなり、その姿もあらわになった。

ソリだ。

犬みたいなんが引つ張っている。

乗っているのは、赤いショートカットの女だ。

袖の長い黄色い服を来ていて、金色のネックレスが目立つ。

「お前ら、何者だ！？」

おお、ここまで男口調つても最近見かけないな。

答えに困っていると水橋がスツと前に出て、

「凜々しいお嬢さん。

私たちの名前などどうでもよいことです。

私たちに重要なのはあなたのお名前……ハグア」

なんかパターン化してきたな。

あれだ。ポ○モンみたいだ。

……でもこっちの止め方が数百倍エグいな。

「な、なんだこいつは？」

まあいい、それよりも何をしている？」

「魔城に行こうとしているんだス」

良平が答えた。

「何？」

そうか……ならいい。

止めて悪かったな」

「あんたは何？」

「私か……？」

私は今気まぐれでシベルリア雪原を保護している、『ADD』のリーダーだ！」

……気まぐれかよ。

なんか変なのに絡まれたなあ。

ここは適当に流すか。

「そうですか。

頑張ってください。

では俺達先を急ぎますんで」

「待て！

お前達、困った時はここに連絡をいれろ！
詐欺から強盗までなんでもやってやる」

全部犯罪じゃねえか！

「冗談だ。

なんでもやってやるから困ったら連絡しろ！
じゃあな！」

そう言い残して、女は去っていった。

名前聞くの忘れてたな。

俺は渡された名刺を見る。

アリマス

……としか書かれてない。

名前……だよな？

どうやって連絡するんだよ！？

「生島あ、早く行くぞ」

どうやら俺はずっと名刺を見てたようだ。

「はいはい」

俺は歩き出した。

なんかかんやあつたが、やっと魔城にたどり着いた。

うん、ほんとに色々あつたよ。

……で、たどり着いた魔城がなんでこんなにメルヘンチックなんだよ！？

なんでピンク色の空に綿アメみたいな雲が浮かんでる？

なんで城門がぬいぐるみ達に囲まれている？

くそっ、やる気起きねえ。

他の面々もポカンと口を開け、その城を見ていた。

「と、とにかく突入だ！」

「おー」

そりゃ棒読みにもなるよな。

俺達は帰りたい気持ちを抑え、城門に向かった。

ちなみに城門は相変わらず名前の定まっていないうし摩さんの必殺技で難なく突破できたよ。

26話：装備は用途で使い分けを（後書き）

えゝ……ご覧のように、場面切り替えの方法を変えました。
じっくり読み直して、分かりにくかったので。
今までのも時間を見て、直せればと思います。

北「ちゃんと読み直したのか」

うん、やっぱり設定が不安になる時があったから……。
でも自分の作品で笑ってしまったよ（汗）

北「別にいいんじゃないか？」

えっ？

北「所詮小説なんて自己満足の世界なんだよ。誰が見てようが最終的には自分に満足できる小説が書ければいいんだ」

何格好いいこと言ってんだよ。

北「実際この2ヶ月でそう思ったろ？」

まあそうだけど。

評価依頼とか宣伝とかしてたのがなんか恥ずかしくなったし。

北「まあ、公衆の面前に出している以上他人の意見も大切だ」

それもそうだね。

さて！

『ファンタジーでいこう！』も佳境に入って参りました。
亀更新ですが、よろしく願います。

後もう一本ーこっちと大分路線が異なりますがーもよろしくお
願います！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8147d/>

ファンタジーでいこう！

2010年10月28日06時20分発行